
愛しの花

ぽち子。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛しの花

【Nコード】

N9540N

【作者名】

ぼち子。

【あらすじ】

広大な国領を持ち、資源豊かで平穏な大国、アウリス。見目麗しい国王陛下には同じく美しい妃が居る。仲睦まじく絵画のようだと称えられる二人には秘密があった。

そして王の後宮にはもう一人、王の寵姫が住まう。いつの間にかに連れてこられた寵姫は王を受け入れることは出来ずに逃げ出そうとしていた。

それでも拒まれても決して離そうとしない、王だけの愛しの『花』

花を巡る、周囲の思惑とともに花は選択を強いられる。
決意と覚悟を。

今はまだ、花は囚われたまま咲き誇る日は遠い。

異世界恋愛モノ。

基本的に戦闘シーンやファンタジー要素はありません。

ロマンス系を目指す王と王の寵姫を巡る話です。

R15と残酷表現は念のためになりますので、きつい表現は多分ないと思います。

王の寵姫

前国王陛下には、いくつかの側妃がいた。

といっても現国王陛下が王位を継いだときには名ばかりになっていて殆どが降嫁するなど、今後の世話を手配を行った。

それにより後宮は今存在はあるものの、無用のものとされ氣にかけられることは少ない。

しかし現国王陛下は誰をも虜にする美貌の持ち主で、後宮に望む女は少なくない。しかし大国の威厳と賢王と周辺諸国にまで称えられる英知を持つてして全て退かれていた。

見目にも美しく善政を布く陛下に人望が集まらないわけなく、その威光は決して翳る事はない。

以前は政を行う王宮は伏魔殿と実しやかに囁かれていたが、王が変わると共に従えていた家臣もほぼ代替わりが行われた。今では多くの優秀な家臣が陛下の周りを囲まれており、今後数十年は安泰と言われるほどだった。

陛下は、王位を継ぐ18歳のとき妃を娶った。

王妃は陛下の幼馴染で、幼少からの決められていた婚約者だ。

その王妃となるべく育てられた姫は、陛下の負けず劣らずの美しさを持ち、傍目からも側近からも見てもよくお似合いで側近自身の誇りでもあった。

実は秘密を持った夫婦だと誰も思いすらしていない。

彼女は、今までの物思いから顔を上げる。窓辺でまどろんでいると、日が彼女を暖かく射す。

窓の外には、優美な庭園が広がっており澄み切った青空と瑞々しく広がる翠のコントラストが眩しい。

こういった日に庭園をゆっくり歩くのが彼女は好きだった。

しかし今はもう直ぐに願いは叶わない。

窓を見つめる。この窓には柵が付いており、彼女は窓から出ることは出来ない。

そして外へつながる扉の向こうには彼女付きの侍女と警備兵がいて、彼女が外に出ようとする道を阻む。

彼らは彼女を守るためにいるが、彼女の言うことなど聞かない。

彼らの敬い傳く主はただ一人であるからだ。

「アルディアンナ様、お茶のご用意をいたしましょうか」

そつと呼ばれた彼女、アルディアンナは部屋に入ってきた侍女の方へゆつくりと顔を向ける。

アルディアンナの無表情で空ろのままこちらを見つめる様子に、侍女であるリザは胸が突かれる思いがした。

アルディアンナも初めの頃はこういう表情をする人ではなかった。訳のわからぬまま連れてこられたのか、おどおどと戸惑いはして

いたが笑顔は花が綻ぶ様であつた。

やがて何故ここに連れてこられたのか、真実を知るとアルディアンナは抵抗した。

抵抗して、それでも変わらない状況に絶望した。

次第に明るい声は消え、愛らしい笑顔は消えた。

優しい性格のアルディアンナは初めから従者にも優しく親切であつた。

あまり大人数ではない侍女たち皆が穏やかなアルディアンナを慕っている。

アルディアンナに仕える侍女たちは、初めの頃は新たに姫に仕えることを拒んだ。

侍女自身達が他所の姫に仕えたときの苦い記憶を引きずっているからだ。

そんな中彼女自身の生い立ちも関係しているとは思つが、彼女は対等に接してきた。

それにどんなに救われたことか。だからこそ、変わったアルディアンナからは離れないようにした。

いつか、またその笑顔を見せてくれる日を願つて。

「リ……ザ……？」

アルディアンナは、今日は意識を向けていてくれるようだ。

反応してくれたことがリザは嬉しい。閉じ込められてからは心を赦してはくれなくなつたからだ。

お茶の用意をしようか、と無防備なアルディアンナに近付く。

「ねえ……リザ、わたしをここからだして？」

縋りつくようなアルディアンナの懇願に、リザの今までしていた笑顔が強張る。

この言葉は別に今初めて聞いたものではない。いつもアルディアンナが望んでいたことだ。

「……そんなこと、おっしゃってはいけませんわ」

リザの脳裏に敬うべき本当の主が思い浮かぶ。それと同時に畏怖

も。

以前にもやはり哀れなアルディアンナの願いに答えた者がいた。後一步のところで事は露見し、アルディアンナはすぐさまこの檻にも似た絢爛を尽くす部屋に連れ戻された。

それからアルディアンナがここから逃げ出そうとするたび、部屋は一層逃げ出さないように強固なものにされてきている。

同じくしてアルディアンナを手引きしたものは、王宮から姿を消した。

おそらく生きてはいるだろう。しかし王宮勤めは一部のエリートの証だ。

やめさせられたということは、左遷されたも同じ。おそらく隠居した貴族の田舎暮らしに付き合う羽目になっているだろう。

それでも命が助かっただけでも、神に祈らずにはいられないはずだ。

事が露見し手引きしたものと対面した時普段は温厚な主の恐ろしさを、見守っていた他の従者も思い知ることとなった。

それと同時に、主の深い執着にも似たアルディアンナに対する寵愛が垣間見えた瞬間でもあった。

「私のアディ。今日はいいい子にしておったか？」

はっと、弾かれるように考えから抜け出しリザが扉に目をやる。

いつの間にかに男がいて、その優美な動作でこちらに近付く。

リザは急いで間を取るように下がり距離を置く。

そして臣下の礼をとるように頭を深く下げた。

一方のアルディアンナは懇願していた表情から、唐突に現れた男に気付いてからは恐怖で怯えている。

仕方がない、アルディアンナをこの檻に閉じ込めている張本人なのだから。

男はアルディアンナの元までたどり着き、結われていない長く艶

やかな胡桃色の髪にキスを落とす。

「……………」

びくつと身体を震わせアルディアンナは身を引くが、男はそれを赦さない。

腰に手をやり強引に引き寄せ、自身の腕の中にアルディアンナを閉じ込めた。

美しくも、妖艶に残酷に微笑む。アルディアンナからは見えなくても、今までで何度も見た表情だ。

「私の愛しいアディ。お前は私からは逃げられぬよ」

「…へ、いか」

アルディアンナは絶望に呻く様に、呟いた。

この男こそが、この豊かで平穏な大国を導く国王陛下である。

そしてアルディアンナはこの男の寵姫であるのは誰の目からも明らかであり、彼女がどれだけ拒もうとも変わらぬ事実だ。

……そうして花は囚われたまま。

側近の思惑

大陸の東に位置するアウリス王国は陸にも海にも恵まれている資源豊かな国である。

広大な国領を持ち、それに裏付けさせるように長い歴史もあった。長い歴史はときに歪に変容するが幸いなことに今まで王家の血は穢れることなく、輩出される王は皆が優秀であった。

アウリス国はいくつもの同盟国があり政敵はややいるものの無闇に戦を仕掛ける国もなく、よって危機迫るような戦の心配もない。だからといって平和に甘んずることなく軍力強化にも手を抜かず、武芸にも長けた国王陛下直々に鍛えられた大陸一の屈強な軍を持つ。さらに現王は賢王と称えられる英知を持った王であり、全てにおいてまさしく安泰の世だと謳われている。

現代の王の名は、クラウディード・フィルディール・アウリス。その名を知らぬものは、まだ物心の付かない幼子を除きこの国にはほぼ居ない。

公式の場では隣に立つ女が居た。

そのベアティミリア・フィーネリアこそが、かの唯一の妃であった。

見目麗しい二人が並ぶと一枚の絵画の様だと専らの評判で、その姿を誰もが目撃見たいと願う。

それと同時に二人の仲も良くお似合いの夫婦と皆が憧れの眼差しを向け、その姿を褒め称えた。

今王宮では一つの噂が囁かれている。

王が妃以外の女を愛し、困っているという。

その噂の真実を知るのは、ごく一部だ。陛下の側近さえも知らされていないことも多い。

「陛下、一部で側妃などの噂がされているようですが……」

陛下の直属の手足ともいえる側近の一人が、恐る恐る言葉にする。戸惑う部下を陛下は一瞥しただけで、仕事の手を止めない。

「あまり広がりすぎると、ベアティミリア様のご評判が……」
「放っておけ」

やっと発した言葉は、ぞっとするほど冷たかった。

それでもしつこく側近は食い下がる。側近にとっても妃は敬う対象であり、ひいては陛下の評価にも繋がるからだ。

この側近以外の者も口には出さないが、概ね同じ意見なのだろう。視線を感じつつ、次の言葉を繋げる。

「ですが、噂は外聞悪く陛下の御威光さえ落としかねません」

「ならばお前が噂をもみ消せばよろう」

陛下の言葉に側近が言葉に詰まる。

この側近は表向きの仕事は優秀だが、そういった噂を消すなどの裏方に発揮される力は持ち合わせていない。

黙り込んだ側近に目もくれず、陛下は書類のサインの続きを止めない。

最後の一枚が終わったのか、筆をおき立ち上がる。

「それか私から『あれ』を取り上げてみるか？それは……見ものだな」

薄く陛下は笑う。いつも温厚な陛下はこんな冷たい微笑はしない。その笑顔をみたとき、途端に側近は背筋に寒気が走った。

すぐさま陛下の怒りに気付き、すぐさま膝まつき否定の言葉で謝罪する。

そんな恐れ戦く側近に声をかけることも一瞥さえくれることもな

く、息を潜め見守るだけであつた側近達も残し退室していった。

「陛下、どちらへ？」

唯一陛下の一番の右腕ともいえる側近である男が後を着いてくる。この男は事情を知っているがあえて行き先を聞いた。

「アルディアンナのところだ」

予想はしていたが、思ったとおりの答えだ。

そのために仕事を早く終わらせたのだらう。

側近のこの男は別に止めはしなかった。仕事は終わっているのだから、文句はあるまい。

王とて、人である。心から休まる時間も必要であらう。

ただ周囲の思惑としては、その対象は妃でなくてはならなかった。

「あまり構いすぎても『花』は枯れてしまいますよ」

「……どういう意味だ？」

殺気立ち睨み付けんばかりの陛下の様子に、今更男は怯えたりはしない。

ただ苦笑まじりに肩を竦めた。無礼だが陛下の言葉に答えは返さない。

男はそのかわり廊下から見える外に視線を移し一つ提案した。

「今日は天気もよろしいですし、アルディアンナ様と庭園散歩でもされたらいかがです？」

アルディアンナはいつから外に出ていないのだろうか。

陛下の脳裏に、眩しそうに外を眺めるアルディアンナが浮かぶ。

しかし一つの懸念もあつた。それで中々気が進まないのだ。

迷う陛下に男は言葉を重ねる。

「それに陛下とご一緒であれば、好からぬ事も考えないでしょう」
以前に一度侍女だけの共を付けさせ、庭園の散歩を赦したことがある。

するとアルディアンナは隙を見て庭園の侍従が利用する通用口から脱出を試みたのだ。勿論それは直ぐに捕まってしまったが。

それ以来、必ず外にでる時は近衛兵も一緒につけて逃げ出さない

ように監視している。

今は部屋から出ることさえ叶わないようにしてはいるが。

「そうだな…緊急時以外はお前に任せる」

陛下の一言で余程のことがない限りはこの男に権力は任された。幸いなことに、現在政に差し迫った事柄はないので安心して任せられるだろう。

側近の男は一步下がりを頭を下げて、迷いなく向かうアルディアンナの元へ向かう陛下を見送った。

この見送る側近の男、シエルファイスはアルディアンナと何度か面識がある。

シエルファイスの記憶の中だとアルディアンナは薔薇のような華美な花ではないが、堇のような可憐な花だ。

一目見て何度か接するにつれてアルディアンナの素直さに触れ、陛下が惹かれて深く愛して、だからこそ王宮奥深くに隠すのも頷けた。

二人を知っている身としては、二人には幸せになってほしいが。

「花が枯れるのが先か……」

手折られた花はそう長くは持たないだろう。

何より花自身が強く咲き誇る『覚悟』をする必要がある。

そのことにまだ、気付いていない。

侍女の憂鬱

アルディアンナの評判は純真で愛らしくはあるが、絶世の美女というわけではない。

普通のなかで、まあまあ可愛いというところだ。

妃であるベアティミリアの美しさには足元にも及ばないとの噂。

そんな女がどうして国王陛下の寵愛を一身に受けているのか謎だ、というのが王宮に勤めるものの意見であった。

「かわいそうなベアティミリア様」

彼女は思わず呟く。

そもそも陛下も陛下だ。お美しいベアティミリアを放っておいて、足元にも及ばないような側妃に足を運ぶ。考えられない、と妃付きの侍女は何度目か解らない憤慨をした。

といっても妃付きは大勢おり、彼女は下っ端に過ぎない。妃に声を掛けてもらうどころか、一日のうちで一目見るのでさえあるかどうかという位置だ。

今も、妃の側近の言付けのとおり花を貰いに行っている。こういった仕事は下っ端である彼女たちの役目でもあった。

いつもの第一庭園に行けば今日は第五庭園に庭師はいるという。

摘むのはいつも庭師に任せているので彼女も第五庭園へと向かった。第五庭園は妃ベアティミリアの部屋からはかなり離れており、当然妃付きの彼女には殆ど足の踏み入れたことのない場所だ。

噂だと、第五庭園には寵愛を受けている側妃が住まう場所があると言う。

それでもまず会うことは無いだろうと高を括っていた。一度も側

妃に仕える関係者に会ったことが無いのが根拠でもあった。

側妃の住まうという噂の第五庭園は花より緑の美しい庭園で、だからといって花がないわけではないが豪華な花は少ない。かわりに控えめな可憐な花が咲き誇っている。

それを見て彼女は鼻で笑う。やはり麗しい陛下に相応しいのが、薔薇の美しさも霞むベアティミリアだと妙に納得する。

彼女がしばらく庭師を探しながら迷路のような第五庭園を歩いていると、茂みが揺れて突然女が飛び出してきた。

「……きゃっ！」

「あっ……」

ぶつかりそうになった女は侍女姿の彼女を見ると、怯えた表情を見せる。女は姫であつたら結われているはずの髪は下ろしており、宝石を着けていない淡色のドレスも質素に感じさせた。

その不審な女を問おうと口を開きかけたが、どこか違う方から声がしたかと思うと急いで女は茂みへと身を隠した。

また別のところから葉ずれの音がして人が飛び出す。

新しく現れた息を切らせながら辺りを見回す女は、彼女と似たように違う侍女服を着ている。ということは侍女なのだろうと予想が付いた。

「ちよつと、貴方失礼ですわ」

ぶつかりそうになった彼女は先程の怒りも込めて冷ややかに言った。

そこでようやくその侍女は彼女の存在に気付く。頭からつま先まで眺めて、侍女の方が問う。

「貴方のその服装は……ベアティミリア妃付きの女官がどうしてこのようなところに？」

謝りもせず怪訝な表情の侍女に益々憤らせた。

そもそも自分は高貴なる王妃殿下の命を受けてここにいる、と優越感に似た誇りがある。

「妃様の命で華を摘みにまいりましたのよ。貴女こそ一体何をして

いるのかしら」

見覚えの無い侍女は、妃付きでないなら恐らく王宮に所属する小間使いの侍女だろう。

仕える相手の居ない侍女のことは立場を下に見ていた。主人に選ばれなかった侍女であるということだからだ。

「私は……それはそうと、こちらに誰が見えませんでしたか？」

自身の後ろの茂みについて視線をやりそうになった。

確かに先程不審な女が来て、その後も今も草の音一つもしなかったからそこに隠れて息を潜めているのだろう。

しかし彼女にそれを教える筋合いはない、と意地の悪い心が膨れ上がった。

「さあ……どうでしたかしら」

「いいからお答えなさい」

彼女のつんとした表情に、侍女は鬼気迫る様子を見せた。

それに思わず彼女が後ずさりしそうになるが、後ろには女が隠れている茂み。これ以上は下がれないので踏みとどまる。

「早くしないと陛下が御戻りに……」

焦るように目の前の侍女は呟く。ここ後宮で侍女が言う『陛下』をさす人物は唯一人しか居ない。

その言葉に彼女はようやく気付いたように息を呑む。

もしかして、この茂みに隠れている女は。その考えに行き着く頃二人に近づく足音が聞こえ始めた。

「知っているならば言わないと命に……」

「リザ」

突然耳に届いたのは低いテノールの美声。

声だけで人が惑わせそうなその声の主はやはり美しい国王陛下だ。侍女のリザも彼女も顔色が変わり、すぐさま膝まついてを頭を下げた。

「申し訳ございません！お茶の御代わりをと視線が外れたときに……」

「よい。あれの行動など予想できたことだ」

くくつと低く笑っている陛下は、どこか楽しげだ。

しかし侍女のリザはまだ震えている。リザにはアルディアンナがさらに籠の鳥になるだろうと予想付いたからだ。

一頻り笑った陛下の視線が隣にいる彼女へと移る。笑みは消え、身を暴くような鋭利な表情だ。

「さてお前は誰だ？」

「あ……私はベアティミリア妃陛下付きのリアンナと申します」

答えを聞いた陛下の目が細まる。リザには陛下の考えが解らないが、嫌な予感に似た不安が胸を過ぎる。

一方の彼女、リアンナは遠目から陛下の姿を拝見したことがあるがこんなに近くは初めてだ。やはり想像したとおりベアティミリアと一緒に並んだときの姿は美しいだろうと思いをはせる。

次の瞬間までは。

「誰の許可を得て、この庭に潜り込んだ」

リアンナの首元には冷たい刃の感覚、気付いたときには陛下に剣先を向けられていた。

リアンナは恐怖のあまり舌がもつれて言葉を発することは出来ない。

出入りした扉は外からは自由に入れた。人の通りのある廊下から繋がっているからか、特に見張りも居らず使用人の出入りもあるために鍵も掛けられていない。

実際リアンナは途中に声をかけられたが、王妃の命を受けているというと皆引き下がった。

まさかこの奥が本当に側妃アルディアンナの居室だとは思っていないから、リアンナも強気でこられたのだ。

「お、妃様が……は……なをご所望で……」

「ほう？」

リアンナの言葉に陛下の瞳に一瞬にして残忍な光が宿る。

そしてなにやら楽しいことが思いついたのか、口元を歪ませた。

「アルディアンナ、出て来い！出てこぬと、この知らぬ女の首が飛ぶぞ！」

ひつ、と陛下の発した言葉でリアンナの表情は恐怖に染まる。

陛下の顔は楽しげではあるが本気だ。本気故に、陛下の後ろに居る近衛兵も侍女のリザも口も挟めぬまま息を呑む。

誰も動けぬまま一瞬間があつたかと思うと、がさつと茂みが揺れて隠れていた女がのろのろとした動作で現れて、陛下の前で力尽きたようにしゃがみ込んだ。

「アデイ、そこにいたか」

陛下の厳しい声色が、甘く愛しいものに向けるものと変わる。

すぐ剣を収め、力尽きたようにしゃがみ込んだアルディアンナを軽々と抱き上げた。

「そう泣くでない。この者の命は保障いたそう」

抱き上げられたアルディアンナは陛下の腕の中で、ひたすら泣きじゃくっていた。

どうしてかはリアンナには解らなかった。普通、陛下の寵愛を受ける者となると違う表情をする。陛下は紛れもなく寵愛を注いでいるというのに。

あまりのことに茫然としているリアンナの肩に近衛兵の手が乗る。拘束はしないが、リアンナは動けないようにされているのだろう。

そんなことをしなくともリアンナはあまりの出来事に動けずにいた。

陛下はリアンナの存在はもう気にも留めていない。泣いている子をあやす様に抱きしめる。

そして、そつと囁いた。

「残念であつたな。お前は私からは逃げられぬ」

大切な宝をしまうように、大事に抱えて陛下とアルディアンナは去っていく。

花は、再び檻の中へ戻されるのだろう。

王妃と騎士

第五庭園の出来事からすぐにベアティミリア妃付き侍女のリアナは、妃の住まう居室の近くまで近衛兵に送られた。

送られた、もとい良からぬ事を仕出かさないように道中監視されていたのだろう。

二度と入らぬようにときつく言い含めたのち近衛兵も来た道を戻っていた。

あの場にいた側妃付きの侍女のリザは、母屋に入っていく陛下とアルディアンナに付いていったきりだ。

結局使いに出されていたはずなのに花も持って帰って来ておらず、リアナは途方に暮れる。

そんなリアナに妃側近の侍女がいつもの固い口調で声をかけた。
「リアナ、ベアティミリアさまが呼びです」

突然訳のわからぬまま、ベアティミリアの居る部屋に通される。
呼んだ当の本人であるベアティミリアは優雅にお茶の時間であった。

その背後にはベアティミリア付きの側近である寡黙な騎士が立っている。入室時にちらりと視線を向けられただけでも、何だか居心地が悪い。

「な、何の御用でしょうか……？」

話を一向に切り出さないベアティミリアに先に言葉にすることを恐縮しつつもリアナが尋ねた。

まさか、先のことを怒られるのではないかと不安が過ぎる。

尋ねられたベアティミリアは傾けたカップを置き、リアナに向き合った。

「貴女は陛下の側妃……いえ、ご寵姫でいらっしゃるアルディアン様にお会いしたのでしょう？」

つい先程のことだ。ベアティミリアの言葉に先程の場面が鮮明に駆け巡る。

それにしても、つい先程のことを知っているということも内心同時に驚いた。

「は……はい……」

「それで陛下のご様子は如何でしたの？」

につこりと薔薇色の口元に弧を描くような笑顔のベアティミリアは麗しい。

リアンナはその笑顔に見惚れながら、陛下と寵姫である側妃のことが思い浮かんだ。

やはり傍目から見ても、あの側妃には美丈夫の陛下はもったいない。

それなのに、だ。陛下が宝物を扱うように大切に抱き上げ、甘く艶やかに微笑みかける。妃ベアティミリアではなく、側妃アルディアンナに。

「……陛下は……」

正直、陛下の寵姫に対する溺愛っぷりを素直に言うのは憚れた。下っ端とは言え自分は敬愛する妃付きの侍女だ。事実を知ったら、このお優しい妃はどんなに心を痛めるだろうか。そのことがリアンナを躊躇させた。

「その……」

「あら、別に隠さなくてもよろしくてよ。陛下がアルディアン様を探し出し、その御手で抱き上げたことは知っておりますもの」

リアンナは後ろめたい思いで俯いていた顔を、驚きのため咄嗟に上げた。

相変わらず華やかに微笑んでいるベアティミリアと目が合う。妃と侍女として距離はあるはずなのに、どこか迫力を感じる笑みだ。
「ただ真実なのかを確かめたくて。それに、アルディアン様はど

ういった様子でしたの？」

ベアティミリアの興味の言葉でリアンナは分からねよう微かに眉を潜めた。アルディアンナの様子を思い出したからだ。

確かに美しさはこのベアティミリアには及ばない。噂通りであるし、目撃した今となつては真実であると知っている。

だからこそ、陛下の寵愛は不可解だった。そしてもっと、不思議だったのはアルディアンナの様子。

あれはどう見ても、陛下から恐れ多くも寵愛を受けている幸せな女のする表情じゃない。むしろ陛下の存在に対し恐れて怯え逃げて、しかし見つかつてしまったことに絶望さえも感じられた。

ただ、リアンナは怒りに触れた陛下が恐ろしいというのはこの身を持って感じてはいるので理解できなくもないが。

「……その……」

「陛下は恐ろしかったでしょう」

クスリと一つ、苦笑に近い笑みを浮かべながらベアティミリアはリアンナの思考を読む。

リアンナは驚いたように目を見開いた。ベアティミリアはリアンナが陛下の怒りに触れたことを知っている。

もしや今回の件で何か陛下に言われたのかもしれない、と不安が起こる。

そのリアンナの恐怖が全身を巡る前、安心させるかのようにベアティミリアが口を開く。

「大丈夫ですわよ、陛下は恐らく何も咎めません」

……花を無事に『檻』へ戻したから。

ベアティミリアの呟いた心の声を聞いているのは、背後に居る寡黙な側近の騎士ぐらいだ。

しかし彼も何を感じても決して表情には出さない。彼の表情を読めるのは妃ぐらいで、考えを直接話すのもこの場では妃だけだ。

「さあ、お話になって？」

優しく語り掛けるようなベアティミリアに促され、リアンナは一

から辿り語りだす。

彼女も多くの事情は知らない。それでもベアティミリアはリアンナの話に耳を傾け時々労るようにも見せた。

話が終わる頃、リアンナにも王妃付き侍女である誇りも戻りつつあった。やはりベアティミリア妃は素晴らしい人である、という尊敬の念は深まる。

「……そう、ありがとう。もう下がってもよろしいですわ」

ベアティミリアの言葉でリアンナは頭を下げると、部屋を退出していった。

リアンナが去ったのと同時に目配せをし、控えていた側近の侍女にも席を立たせ退出させる。

今、この部屋には側近の騎士とベアティミリアだけだ。

本来ならば、王の妻である妃が男と二人つきりという状況は好ましくない。

しかし男は国が誇る騎士団の將軍職に付いている。この騎士団の対には近衛団があり、二つの団は日頃から切磋琢磨して剛強を維持している。

近衛団の騎士は王に近くに控え騎士団の騎士は王妃の近くに控えることで、己の命を賭けて剣を捧げ王に忠誠を誓う。それが仕来りのため、王妃の傍には騎士団直属の騎士が常に控えている。

特に、この騎士エリクシエスはベアティミリアに絶大な信頼を置かれていたため、二人きりといって誰も責めるものはいない。

「……何を、お考えですか」

今まで一言も言葉を発しなかったエリクシエスが、二人つきりになつた途端に口を開いた。

普段から彼が寡黙だと知っている者からするとそれだけで驚きだが、ベアティミリアには彼の言葉が予想ついているため今更驚いたりはしない。

それどころか、彼の真意を問う言葉に微笑を一つ零すだけだ。寡黙ゆえに機微の観察に長けているエリクシエスでも、ベアティミリアの考えは読めない。現にその微笑の意味も測りかねた。

「……わたくしは、ね」

微かに惑うエリクシエスにベアティミリアは苦笑気味に視線を外した。

どこか遠いような、寂しそうな横顔のベアティミリアに気付く。

「ずっと望んでいたものが、ありますのよ……貴方にはお解りになりますかしら」

ふっと、他を向いていた顔をエリクシエスに合わせ、ふらりと一歩こちらに近付く。

心もとのない儚げな様子のベアティミリアにエリクシエスは近寄り支えそうになったが、一步を踏み出そうとして思いとどまった。

エリクシエスは自身の騎士服が枷のように重く感じ、それで自分の立場を思い出したのだ。

「申し訳ございません……過干渉でした」

エリクシエスが一步下がり、頭を下げる。

それを見たベアティミリアもそれ以上は近寄らず、伸ばそうとした手を戻す。

表情を俯かせ一拍何かを躊躇うようにおいてから顔をもう一度上げる。

「貴方には少々難しいかもしれませんがね」

と、いつもの咲き誇る様な笑顔を見せた。

抗えない寵愛

庭園で捕まってからアルディアンナは既に泣き止み、しかし気落ちしていた。

何度目からか解らない脱走が失敗したのだ、成功を夢見ていた分落胆も大きい。

あるとき、ベアティミリア妃付きの女官さえいなければ。誰にも追いつかなければ逃げ切れたのに。

そう思うが実際には無理だろう、と同時に心のどこかで思っている。

どこへ行ってもアルディアンナは捕まり、この部屋に戻される。

この男に、国王陛下に。現にいまアルディアンナは陛下の腕の中から逃げ出せない。

後宮のアルディアンナに与えられている母屋に入り、腕から降ろさないまま寝室に入ってしまった。

寝室には侍女のリザは入らずに二人を見送るように頭を下げ、扉を閉める。寝室にはアルディアンナと陛下の二人つきりだ。

これから起こることは簡単に予想でき、恐怖に身を固める。

もう何度も交わっているのに、快樂におぼれることも出来ずアルディアンナはただ恐怖していた。

広い寝台の真ん中に下ろされて、もうアルディアンナに逃げ場はない。

降ろされ横たわったアルディアンナの上を、陛下は覆いかぶさった。

「……いつそのこと、自由になる足を手折ってしまおうか」

アルディアンナの細い足首を簡単に掴む。

陛下にとって掴んだ力は多少だが、それでも微かに痛みを感じアルディアンナは顔を顰めた。

アルディアンナの顰めた顔を見て、陛下は手を離す。

そして少しでも離れようと身を擦るアルディアンナに顔を寄せ、深くキスをした。

息もつかせぬそれに、アルディアンナの意識はいつも飛んでしま
いそうだった。

意識が溺れそうになる寸でのところで陛下はアルディアンナを解
放する。

もうそれでアルディアンナは逃げ出す力は奪われて無い。しかし、
陛下を真っ直ぐと睨むように見つめる。

「もう……お止めください！」

「いつそのこと素直に受け止めたらどうだ……私はお前を愛してい
る」

アルディアンナの解けた髪を一房とって、キスを落とす。

甘く愛しいようにするその様にアルディアンナはいつも何も言え
なくなる。

「私には無理……あなたは身分が違いすぎるっ……」

まるで雲の上のような存在だった。

アルディアンナの日常にはまるで関わるはずのない人だったのに、
どうしてここにいるかアルディアンナは理解できず、理解したく
ないでいる。

腕の中で泣き出しそうなアルディアンナに陛下はいつもとは違う、
困ったような微笑を見せた。

「……名を呼んでくれ、アディ」

いつも行為の時に陛下は、名で呼ぶことを願う。

勿論アルディアンナには受け入れがたく必死に頭を横に振って、
それを拒否する。

それでも陛下は同じ言葉を繰り返す。視線を逸らすことを赦さず、
真っ直ぐに見つめて。

……昔のように、寂しそうに笑うなんてズルイ。

そうやって、胸が苦しくなってアルディアンナは抵抗する術を失

う。

「……クラウ……」

か細く消え入るような声でアルディアンナは呼ぶ。

その昔を思い起こすような愛称に陛下は満足げに微笑み、とうとう泣きじゃくるアルディアンナにキスを一つ落とした。

そしてそのまま、頬から耳元、そして首元へと下がっていく。

胸元のリボンが解かれあつという間にドレスは脱がされて、ベツトの端に追いやられた。

陛下はゆつくりとアルディアンナを快樂へと誘い、自身の欲望をもぶつける。

いつものように何度も行われる行為にアルディアンナが意識を失う頃。

「私の傍に居てくれ……アルディアンナ」

陛下の悲しいぐらいの懇願の声が聞こえたような気がした。

アルディアンナが意識も夢つつつのまま目を開けると、普段は居ない人がいた。

カーテンが締め切られていて部屋が暗くとも明るく見える蜂蜜色の長い髪を背に流しながら、こちらを優しく見つめている。

アルディアンナの意識が戻る頃、いつも隣はまるでそこに居なかったように冷たいのに。

「へいか……？」

これは夢なのだろうか。先程まで何をしていたのだろう、と思いつ返すが思い出せない。

ぼんやりと働かない頭でこれは夢なんだろうと考えた。

寝ぼけたようなアルディアンナの呟いた声が聞こえていたのか、陛下は微笑みかけながら髪をゆっくり撫でる。

その優しい動作に、またアルディアンナは夢へと誘われていく。

「アディ、名を呼んでおくれ」

「クラウ……？」

夢うつつ素直に名を呼べば、陛下は益々優しく微笑みかけた。

その微笑みに遠い記憶が重なる。まだ幼い顔だった頃の記憶はアルディアンナを惑わす。

「クラウ……おかしいの……」

「ん？」

「だって……だってね、貴方が国王様だって言うの……」

言葉に陛下は一瞬笑みが強張ったが、また優しく微笑み促す。

きっとアルディアンナは昔の話の続きだと思っているのだろう。

それが夢を見ている。

あの幸せだった頃の。

「……そうか」

「だってあなたはここに……に……に……」

再びアルディアンナが意識を手放した。

おそらくまた幸せな夢に居るのだろう。表情は起きているときよりも、柔らかく穏やかだ。

陛下はアルディアンナの髪を救い上げて、キスを落とす。

「……私のアデイ、どうか笑っていて」
まだ、花を手放せずに関まで閉じ込めたまま願うしかない。

遠い日の故郷

アウリス国の、王が住まう都よりやや北方にある領地。

冬場は多少雪が積もり不便ではあるが、夏場でも涼しいその地は静養地として密かに人気である。

その静養地から人氣がちょっと外れた王都よりの、子爵の治める領地は特筆するものはない。

緑豊かで穏やかな風土であり王都に比較的近いとはいえ、早馬を走らせても王都から一日は掛かるこの地は煩わしい争いごともないかわりに関わることもない。

国に仕える貴族としては、政に関われないのは物足りないと感じるかもしれないだろう。

それでも子爵家の長女であるアディはこの地を愛している。

父である子爵に野心はなく、家族と領民や領地を深く愛しているからこそ一家はこの地に根付いて生活をしている。

街を歩けば領民は笑顔で挨拶をくれ、手を伸ばせばすぐに自然に触れることが出来る。

質素な生活を強いられるため、貴族の娘が手に入れるはずの綺麗なドレスも宝石もない。憧れないといえは嘘であるが、それでも勝るものではない。

この穏やかばかりが取り得の領地の、獣の居ない森の館にある日貴婦人が住み着く。

その貴婦人は品がよく、どこか高貴な気配をもつ人であった。

同時に儚げな様子で、やはり病弱のため療養に訪れたらしい。

当時10歳になったばかりのアディには詳しくは訊かされなかったが、貴婦人に花を届ける役目を買って出た。

貴婦人は絶世の美しさを持つ人で、アディは彼女の笑顔が見たい

がために足繁く通った。

元々天真爛漫で家族からも領民からも可愛がられているアディに、貴婦人がアディを愛しく思い心を開くのは当たり前のことだ。

そこでアディは貴婦人から様々な教育も受けた。

質素とはいえアディも子爵の娘、そのための淑女としての教育は必要である。国の歴史から有力貴族の勢力関係、刺繍に様々なマナーなどだ。

アディは正直自身に役立つとは思えなかったが、貴婦人の教えが良かったのか楽しんで通うようになった。

何より貴婦人の話が面白い。王都で育ったらしく、王都の街の話や社交界などアディの知らない世界の話は、アディの期待や想像に高鳴る胸をさらに膨らませた。

話していくうちに貴婦人は見た目にはまだ若く見えたが、アディと同じ年頃の子がいるらしい。

あまり詳しくは話してはくれなかったが、幼いのに置いてきたことを悔やんでいるようで時々する哀切な表情にアディも哀しくなったのを憶えている。

貴婦人と出会って、一年が過ぎようとした頃。

いつものように森の館へ行く途中、分かれ道で馬の蹄の跡を一つ見つけた。

馬車の轍の跡が付いていないということは単独だろうと予想できる。貴婦人を訪ねてくる人は皆馬車で、珍しいと驚くアディは好奇心に誘われた。

今より幼い頃から、獣の居ないこの森でアディは何度も遊んだ。

この道の先には小さな泉があるというのは知っている。

まだ貴婦人との約束の時間まで少しある。迷った末いつもの道ではなく、アディは泉の方へと歩みを進めた。

泉への道は通る人は少ないので道は少々険しい。足を取られないように、蹄の跡を辿る。

森を抜け少々広いところになると、やはり泉の辺に馬を休めているのが見えた。

そしてその傍らにはアディと同じような年頃の子どもが座っている。

その横顔をみて息を呑む。その整った顔立ちはどちらかというと可愛らしいが中性的で、まるで本で見た天使様のような美しさだ。

蜂蜜色の艶やかで真っ直ぐな髪を背に流しゆるく一つで結んでいる。目立たないような色の乗馬服だが、それでも愛らしさは損なわれることはなかった。

まじまじと横顔を見て、ある人の面影が浮かぶ。今から尋ねようとしている貴婦人である奥様にそっくりだ。

ある予測を胸にアディは思い切って話しかけた。

「貴方、森の館の奥様のお嬢様ですか？」

アディの質問に、ようやく存在に気付いたのか顔をこちらに向け

振り向いたその顔は、思いっきり不機嫌そうに顰めている。

「失礼な娘だな、お前は何者だ？」

顰めた顔でも真正面に見て、一瞬アディは見惚れた。

アイスブルーの瞳は金の髪に良く似合っていて、やはり絵画から出てきたのではないかと思わせる。

髪は在り来たりな胡桃色で、黙っていれば可愛く見えなくもないというのが定評のアディには少々羨ましくもあるが。

「私はアルディアンナ、アディと呼ばれています。よろしくね」

につこりと笑顔を浮かべ、教え込まれたようにきちんと挨拶をする。これも淑女教育の賜物だ。

しかし頑張つて挨拶したアディを目の前で、あろうことが馬鹿にするように鼻で笑った。

いくら淑女教育を受けたとはいえ、よく言えば天真爛漫で、ようするに無鉄砲のお転婆娘のアディはすぐさま眉を吊り上げた。

「ちよつと！挨拶したら名乗るのが礼儀だと教わらなかったの！」

「煩い！お前に教える義理はない！」

ぷいっと顔を背け拗ねるように膝を抱えた。

アディは一瞬言い返そうとしたが、以前貴婦人と同じく見た表情に言葉を飲み込み黙った。

それに、あまり声を上げるのは淑女として相応しくないと貴婦人に習ったのだ。

「ねえ、奥様に会いに行かないの？」

アディの言葉に、また何も返さない。

返さないがやはり奥様に会いに来たのだろう。ぐつと何かを思いつめているような表情だ。

黙り込んでしまったが、それでも待ったため同じく膝を抱えるように座り込んだ。

何か迷ったような表情をしていたから。だから待とうと思った。

「……会つてもいいのだろうか」

静かな森に小さく呟かれた声をアディは聞き逃さなかった。

やっと洩らした本音を閉ざされないようにすかさず返答をする。

「会いたくないの？」

「お会いしたいに決まってるだろう！しかし母様は……」

答えを聞いて、アディは思い立ったように突然立ち上がった。

そして隣の人物の腕を取って、そのまま走り出す。抵抗する間もなく、あまりに唐突な行動にアディのなすがままだ。

「お、おい！」

「馬鹿ね！あんなにも楽しそうに……それなのに悲しそうに貴方の話をしていたのに、会いたくないなんて思っている訳ないよ！」

アディの言葉に、引っ張られている人物は驚いたように大きな目

を更に見開いた。

この子は何も知らなくとも、アディは知っているのだ。
ならば答えも、アディがすべきことも一つだ。

「迷ってないで会えばいいじゃない！」

館へはアディが知っている裏道を使えば、泉からは近い。

結果庭先にでてしまうので無礼だというのは解っているが、そんなものは構っていられなかった。

垣根と茂みを越えて、出た先には森の館の主である貴婦人の愛している庭園。

庭園が見て楽しめるように作られているテラスでは、思った通りの人物がお茶をしている。その時間だと思ったからこそ、この道を使ったのだ。

「奥様！」

「アディ？こちらから来てはいけませんよ……あら？」

諫めるような奥様の目が、アディの後ろの人物に移り留まる。

驚いたように目を見開き、信じられないといった様子で口を手で覆った。

「もしかして……クラウ？」

アディがそのまま引張り、背を押して貴婦人の前へと突き出す。
まだ気まずそうな顔をしていたが、きっと大丈夫だろう。アディは安心させるかのように笑顔でさらに押し出した。

貴婦人である奥様が手を腕を広げ抱きしめ、それをまだ戸惑うように抱きしめ返しているのを見守ってから、アディはそつとその場から離れた。

遠い日の故郷（後書き）

お読みいただきましてありがとうございます。
この話から暫く人物の呼称を変えています。
読みにくく申し訳ございません。

幼い幸せ

「見つけた！」

今日は居ても邪魔だろうと思いアディは、森の入り口で薬草を摘んでいた。先程の感動の再会を目の当たりにして、二人水入らずがいいと思ったからだ。

だからこそ、いきなり腕をとられ声をかけられたから驚いた。

貴婦人の元にいるはずのその金の髪をもつ人物は、ここまで走ってきたせいか息も上がり整えてあった髪が大分乱れている。

そしてなぜかとても怒っている表情をしていた。

息が整うのを待つと中性的な可愛らしい顔に似合わず、ぎろつと睨みつけてきた。

「許可もなく勝手に居なくなるな！」

「あら、別に貴方に断る必要はないはずよ！」

折角気を利かせたのだ、そういわれる筋合いはないはずだ。と、アディは咄嗟に言い返す。

しかし目の前の人も引く気がないのか更に怒鳴るように言葉を重ねる。

「あれからどれだけ探したと思っているんだ！」

正直アディはなぜ怒られているのか解らない。

解らないが怒っているが微かに焦っている表情が見えた。

そして先程の言葉でどうやら心配をかけたようだと思い付き言い返す言葉をなくして小さく謝る。

アディの謝罪に我に返ったのか、同じく気まずい顔をした。

暫く気まずい沈黙が続くが、耐え切れなくなつて先に破ったのはアディだ。

どうせならと思い、一番気になっていることを尋ねた。

「……あれから、奥様とは話せたの？」

アディの質問に少しだけ照れくさそうにした。
それでも表情から嬉しさが滲み出ている。

「ああ、お前の……アディのお陰だな。感謝する」

「うっん、よかった」

何だかんだといつて名前を憶えていたらしい。嬉しくなって自然とアディは笑顔が浮かぶ。

そこで、ふとアディは思い出した。

「私、貴方の名前を聞いていない」

「ああ、私はクラウ……クラウディードだ」

アディは目の前の人、クラウの名前を聞いたときに微かに違和感を感じた。

そして考えもなしに素直に思ったことを口にしてしまう。

「男性らしいお名前ね」

「……は？」 二人の間に微妙な空気が流れる。

……もしかして、もしかしなくても。

間違いによりやく気付いたアディの額に冷や汗が流れる。

クラウの服装である乗馬服は、貴族の子息そのものだけど一人で馬に乗ってくるくらいだ。

道中はドレスじゃ邪魔になるし令嬢の姿では危険だし、こちらのほうが合理的だと勝手に思っていたが。

さらにクラウの面立ちから決め付けて、正直大変言いにくいが『男装』かと思っていた。

勿論アディの全ての思考が出ている表情をクラウは綺麗に読み取った。額には青筋が見えなくもない。

「……まさか私のことを女と勘違いしているな？」

「ええ！？」

まさしく違うのか、と言わんばかりのアディの表情にクラウはまた怒鳴った。

さすがにアディも自身が悪いと思ったのか、時々合いの手のように謝罪を入れつつクラウの怒りを受け入れる。

ようやく少し気が済んだのか、まだ眉を寄せてはいるがアデイの方に手を差し出した。

訳もわからずアデイは差し出された手とクラウドを交互に見る。

「早く手を出せ」

「え？」

突然のことに戸惑うアデイに焦れて、クラウドは勝手に手を掴み歩き出す。

これでは先程とは逆だ。森に入り、館に向かうのが解った。

「いいの？」

「何が？」

不機嫌そうに返すクラウドに、アデイは言葉に詰まる。

先程の再会は一体なんだったんだろうか。アデイの知る中では一年は会っていないかったはずだ。

もつとつもる話はないのだろうか。アデイはそう思っても遠慮して言いよどむ。

「……もう10になるんだぞ。そこまで恋しいわけではない」

アデイが気まずい表情で黙っていると、クラウドはややぶつきらばうに言葉にする。

これはおそらく気恥ずかしいのだろう。アデイは小さく笑う。前を歩くクラウドは引つ張っているのを見ていないが。

「そういえば、ここまで一人でできたの？」

この領地まで王都からは早馬を使っても丸一日は掛かる。

馬の扱いに慣れた感じだとはいえ、子どもの体力ではまず無理だろう。それにクラウドはずっと一人で行動していたようである。

「いや……近くに別邸があつてそこから一人で来た」

然程離れていないところに貴族に人気の静養地がある。ここから単独で馬に乗ってきたなら、朝出でて昼までには着くぐらいの近さだ。

しかし、クラウドはどう見ても一人で行動が許される身分じゃないはず。

田舎で社交関係がほばないとはいえ、さすがにクラウの節々の言動などで察していた。

貴族の中でも、本来ならば口を聞くのもない存在ではないだろうか。アデイに疑念が過ぎるが、あえて黙って飲み込んだ。

「馬は得意だからな」

少々得意なクラウに、意外な思いでアデイは観察する。

アデイが勘違いしたようにクラウはとても華奢で、重ね重ねに失礼だが体力もなさそうにみえた。

それこそ日常的に野を駆け巡っているアデイのほうがりした体つきに見えるのに。

「いいな、私も乗ってみたい」

余程危なっかしいのか、アデイは両親からもクラウの母である貴婦人からも乗馬は止められている。

それに対して日頃から不満を洩らすアデイは、反対されていることを思い出してか口を尖らせた。

「……ならば、教えてやろうか？」

「本当!？」

アデイの予想外に大きい反応に、クラウはたじろぎながらもしっかり頷いた。

頷いたのを見て、ますますアデイは笑顔が嬉しそう広がる。

「ああ……その、礼だ」

「礼？」

何の礼だろうか。話がわからず、アデイは首を傾けた。

やはり照れくさそうにしていたが、今度こそクラウは違う方を向かずにアデイに向き合った。

繋がったままの手に少しだけ力が入り、クラウの熱が伝わる。

「背を押してくれて……ありがとう」

クラウの笑顔はやはり綺麗だ。

それに見惚れたアデイに居心地が悪くなったのか、クラウはまた前を向きアデイを引っ張って館へと進む。

先程よりちよつと歩調は早い。

「母様がアデイとお茶をしたいらしいから急ぐぞ！」

やや怒ったようなクラウの口調に、やはり照れているのだと解る。何だか嬉しくなつて、アデイは引つ張られつつも始終笑顔だった。

お茶会の主催者である貴婦人も始終笑顔だった。

特にクラウとアデイの時々喧嘩に近いやり取りをみては、微笑ましくそつに見守っていた。

母に会いに来るためと、ついでに乗馬を覚えてくれるという約束のためか、クラウは度々こちらに赴いた。赴くときはいつも一人なのでアデイは不思議にも思っていたが。

それでも、アデイにとってはいつまでも続いてほしいと願う日々だ。

実際に、この忘れられない10歳の出会いが四年間続いた。

誰かの気持ちを代弁するかのような激しく雨が降った、あの日まで。

別れの雨

神がかったような美しさは相変わらずだが、次第に幼さ故の華奢さは消え遅しくなっていくクラウ。

何度目かに訪れた時には剣を習いだしたと熱心に語った。そのためか筋力は付き、見る見るうちにアディと然程変わらなかった背も伸びていった。

今では深窓の令嬢のような容貌はなく、すっかり絵本にあった王子様や騎士様のようだ。

可愛らしさが消え、行動も格好よくなっていくクラウにアディは当然惹かれるが、言動の端々に高貴な雰囲気漂わせるクラウには何も告げることは出来ない。

貴族の掟は大きく、貴族でも足元にも及ばないような貧乏貴族であるアディには身分の差は越えられない壁でもあった。

クラウもまた、変わらず素直で明るいアディに惹かれていた。

さすがのアディも無鉄砲のお転婆娘のなりはひそめ、可憐な少女へと育っていく。クラウの母である貴婦人の教育が行き届いているのだろう、出会った頃より貴族としてのマナーは完璧に近い。

幼いままであるならば気にしなかったが、クラウにはどうしても隠したい事情があった。

お互い惹かれてはいるが、自身のことを思うと後ろめたくとても言い出せない。

言い出せないが年に数回しかない逢瀬の度に想いは深まっていく。このもどかしい距離が、動き出せないお互いが望んでいる距離でもあったようだ。

それでも一番輝いていた時期だと、大人になったアルディアンナ

は思っている。

偶然の出会いだとしても、アデイの大切な宝物のような思い出だ。この長いようで短い幸せな時間はあっ気なく終わりを迎える。

その日は雨だった。まるで誰も悲嘆にくれるような、そんな激しい雨空だ。

いつもは主人がそうだからか明るいはずの森の館が、陰鬱で沈んでいるようだった。決して雨の天気だけのせいではない。

館で一番日当たりの良いはずの寝室で泣き止まないアデイの頬を、苦しそうな息の貴婦人は弱弱しくだが優しく撫でた。

アデイは大粒の涙を零し、目も頬も真っ赤にして痛々しい。勿論アデイだけではなく、寝室に控えている貴婦人の従者も同じく涙を流していたり、流していなくとも痛みに耐えるかのような沈痛な表情をしている。

「そんなに泣いては……いけませんわ……」

「奥様、いやです。まだ教えてもらいたいことが一杯あるのに！」

縋りつくように泣くだけのアデイに貴婦人は困ったような微笑を見せる。

貴婦人は秋の終わりから体調を崩してあつという間だった。日に日にベットから起き上がれずに弱っていくばかりで、アデイは見てることしか出来なかったのが歯がゆく思っていた。

こちらに滞在していたのは病のための静養が目的であり元々身体が弱く、病のため長くはないとも診断されている。

むしろここまで長く生きながらえたのが奇跡とも言われ、医者を驚かせていた。このまま治ってしまうのでないかと誰もが期待し錯覚したほどだ。

しかし着実に進行していて、貴婦人はずっと病魔と闘い続けていたが、今晚でその命の日は消えるのは誰の目から見ても明らかだった。

ただ貴婦人の優艶な面立ちはやつれて苦しそうだが絶望の色は見えない。ずっと自身の命の儚さを受けとめていたからだろうか。

たった一つ心残りはあった。それをアディに託すかのように手をなけなしの力で握り締めた。

「アディ……おねがい、あの子を……クラウを……」

「もう少しでクラウが来ますよ!」

「クラウをお願い……きつとあなたなら……支えに……」

返事をするかのようにぎゅっと弱弱い手を握りかえしたアディは、貴婦人に仕えていた古株の侍女に突然引き離された。

アディが抵抗する前に、一人の男が部屋に入って横たわっている貴婦人の胸に縋りつく。

誰かに似ている髪の色の後姿しか見えなかったが、アディは一瞬で解った。

貴婦人が心から愛した人。今の今まで一度も見舞いに来ることはなくても、貴婦人も心から愛されていたのだ。

貴婦人に縋る男の慟哭を聞きながら、大人しく部屋から出されるとクラウもいた。やはり顔色は悪く青ざめている。

「クラウ!」

すぐさまクラウの腕を取る。アディが軽く引つ張ってもクラウはその場から動こうとしない。

貴婦人の寝室の扉の前で目の前で立ちすくんでいる。

残酷な現実に対しアディも悲しくて怖い、クラウも受け入れるのが恐ろしくて一步も動けずに居るのだろう。

「アディ、母様は……」

「奥様はクラウにも会いたいと思うの……だから会ってきて!」

恐らくもうこれで最期だ。最期に貴婦人が会いたいのは愛する人との絆であるクラウであろう。

迷っていたクラウの背中を押すように、アディは懇願した。

クラウは一瞬大きく揺らいたが目をきつく閉じて、ゆっくりと開いたときには覚悟を決めた。

「……いつてくる。でもアディ……終わったら傍に、一緒に居てくれ」

アディは、一瞬あの初めて出会った日の幼い少年が重なる。

あの日、単独で貴婦人に会いに来た少年。いくら成長をしようと母親を慕う子の気持ちはいつも変わらないのだ。

繋がれた手をぎゅっと握り力強く頷く。きつと孤独な少年の悲しみを分かち合えるのは、貴婦人を慕っているアディだけだから。

そしてその手が名残惜しそうにそっと離されてから、クラウの背を扉の向こうへと見送った。

それから雨が止んだのは、翌日のことだ。

憎いほどの青々とした空が眩しかったのがいつまでも印象に残っている。

あの悲嘆に暮れた日から、三日。たった三日しか経っていないことにアディは少しだけ驚く。

ようやく涙は止まった。それでもまだアディは心からの笑顔は作れない。

喪に順ずる黒の服装で、アディは外から森の館を眺めた。隣には同じように黒の服装のクラウが寄り添っている。

「……もう、ここへくる理由もないね」

貴婦人の墓は王都で建てられるらしい。貴婦人の愛した人の希望であり誰も反対しない。

ここは貴婦人にとって故郷でもなんでもない関わりのない地のはずだ。ただ静養に訪れ、結果として終焉の地になってしまった。

母である貴婦人が居なければクラウにも、もう縁はなく訪れる理

由もない。

森の館に一緒に住んでいた従者たちも王都に帰るらしい。明るく優しくったこの森には誰も居なくなる。

「……アディを連れて、王都に戻ってしまいたいがそれも赦されな
いか」

ため息交じりでクラウは言う。まだその表情は沈んでいる。

クラウの言葉が本音だとしても、アディは素直に喜んで頷けなかった。

貴婦人が愛してくれたこの地を、故郷を愛している。アディにはこの地を離れることは初めから選択のうちにないのだ。

だから王都へは行けないし、行くつもりもなかった。

「クラウ、お父様の後を継いでしつかりね」

ようやくできた、ぎこちない笑顔の返答がアディの精一杯だ。

本当は離れたくない。アディは一度に貴婦人だけではなく、その子息であるクラウも失うのだから。身分など関係なかった幼い日々との別れた。

ただ一瞬だけ貴婦人の言葉が頭を過ぎるが、それはきっと時が解決してくれるだろう。

痛みに耐えるかのように顔を歪めたクラウがアディを引き寄せ抱きしめる。

すっと抵抗することなくアディはクラウの腕の中に納まった。

こつやつて引き寄せられたのは初めてで、これで最後だろうとアディはぼんやりと思案に沈む。

「……いつか赦されるならば、必ず迎えに行く」

耳元で囁かれた、いつかの約束。それはきつと無理だとしても。アディは願うように頷いた。

彼女の結婚

「結婚、ですか」

アルディアンナが19歳の時の話だ。

金を掛けられずあまり立派ではない執務室の、机越しの父は暗く沈んだ表情をしている。

それも仕方がない、父が先程告げた結婚相手は歳が随分離れた下級貴族である。

アルディアンナとは20近く年上であり過去には既婚歴もある。しかも元は一代で財を成した商人の男で、その爵位さえも金で買ったようなものだ。

そんな巷でも強欲と評判の男が血筋に本物の『貴族』を欲した。一方で、アルディアンナの父が治めるクレイレ領は近年稀に見る不作が続いている。

勿論贅沢はしていないし、領民にも同じく過酷な生活を強いても来期まで持ちこたえることも儘ならなく、追い詰められていた。

幸い領民はクレイレ子爵の人柄を知っているからか誰も責めないが、今のままでは明るい展望もない。

要するに財政が苦しい我が領地を救うための政略結婚であることを、アルディアンナは瞬時に理解する。

王都の貴族からしたら貴族で19歳で婚約もないのは珍しいが、この権力とは縁遠い田舎の領地ではざらだ。

王都の貴族でも婚約は早くとも結婚までは20を過ぎてからだが、地方ではさらに遅いこともある。

2人姉妹の長女であるアルディアンナもいずれ父の後継となる側近の誰かを婿にするのだらうと漠然と思っていた。

思っていたより現実には手厳しい。沈鬱な父の表情からもアルディ

アンナを手元に置いておきたかった様子が伺える。

しかしアルディアンナにも父にも拒否権はない、もうこれは決定事項なのだから。

父を安心させるように、表情を緩めて微笑む。

「将来を約束した相手もいないのですから心配しないでください、お父様」

言い切ったアルディアンナの脳裏に一瞬だけ、蜂蜜色の面影が過ぎった。

それでも、あんな約束事を信じられるほど子どもでもなかった。

その後の両家の取り決めにより、結婚は一年後に行われることになった。

約束の通りすぐに領地は援助を受け、何とか冬を凌ぎ徐々にだが回復していて、来年の冬は大丈夫だろうと一安心する。

アルディアンナにとって嫁ぐのは愛する領地の為だった。愛し育ててくれた領地や領民に対しての最大の恩返しにもなると考えていた。

結婚の準備や生活の中で目まぐるしく日々は過ぎ、一年後の結婚式まであつという間に近付く。

あと一週間もしないうちに、アルディアンナは見知らぬ地に嫁ぐ。納得のこととは言えたため息は知らず内に増えていき、アルディアンナの家に仕えてくれる数少ない侍女達も心配そうに見守っている。この愛する地を離れなければいけないという事実だけが、アルディアンナの心を鬱々とさせた。

周囲に心配を掛けていると解っていたが、それでもため息は減らなかった。

「アディお嬢様、お客様がいらしておりますが……」
「お客様？」

その日は生憎両親はいないので、長女であるアルディアンナが仕切らねばならなかった。

留守ということで約束などはないはずだが、待たせるわけにもいかないだろう。

とりあえず失礼のないように身だしなみだけ確認し、客人が通されている応接間へと急ぐ。

応接室に入ったとき視界に入った、あまり上等といえないソファ―に座っている男に妙な違和感を感じた。

こんな貧乏な下級貴族の家なんぞには縁遠いはずの人だ。

地味に見えるが上等な衣服を身に纏い、悠々と座っている。

上等じゃないソファ―が高級に見間違うほど高貴な風格であり、この場にそぐわなかった。

それでも構わずその人物は、アルディアンナが視界に入ると微笑んで優雅に挨拶を行う。

「クレイレ子爵家のアルディアンナ様でいらっしゃいますね？私はシエルファイス・ラングランドと申します」

「ええ。父の代わりで申し訳ございませんが……」

「いいえ、私は貴方に御用があつて参りました」

きつぱりと告げる目の前の男に、アルディアンナは心当たりがない。

同時に聞いた『ラングランド』の家名には昔の記憶が呼び起こされる。

森の館の貴婦人との勉強会を思い出さなくなつて久しいが決して忘れることはなかった。

正直学んだときは何の役に立つのかと思つたのだが、その記憶が今役立った。

確か王家の血筋にも何度かつながりのある上位貴族の家名だ。

学んだときの6、8年前と変わっていなければ当主は宰相の地位であるが、宰相とは名が違つので恐らくこの男はラングランド家の関係者といったところだろう。

それでも権力に近い上位貴族と縁を持った記憶はまったくないので、つい訝しげに顔を顰めてしまう。

「……私に、ですか？」

「はい、単刀直入に申し上げると結婚を取りやめていただきます」
アルディアンナはシエルファイスの言葉に固まった。

突然、何を言っているのだろうか。

思考が真っ白に停止したまま、何とか言葉を搾り出す。

「それは、どういう意味で……」

「その言葉の通りですよ。クレイレ子爵家とクラリッツ男爵の婚姻を破棄します」

クラリッツ男爵はアルディアンナが嫁ぐ予定の家名で、当主だ。

アウリス国では領地を任されている貴族には、当主の婚姻を国王陛下に報告する義務がある。

といってもそれは形式的なもので、余程の急ぎの理由がない限りは半年から長くて一年以内に許可が降りる。

最も、広大なアウリス国を治める国王陛下本人が全ての貴族を統括しているとは考えられない。

「どういった権限でそうなさるのですか」

昔のように怒りの感情のままに怒鳴らなくなっただが、アルディアンナは静かに気色ばむ。

クレイレ子爵家にとってこの婚姻こそが、領民の救われる手段だというのに。

反故にしたとなれば、莫大な違約金を要求されるだろう。

クレイレ子爵家にそんな余裕などあるわけがない。

「ご心配はなさらず。陛下は却下とのご判断です」

考えを見通しているのかようなシエルファイスに今度こそアルディアンナは言葉を失った。

却下される場合は、どちらかの家に不服の申し立てがあった場合
かもしれない見過ごせない問題が起きたとき。

例外で今まで聞いたことがないが、権力者である国王陛下ご自身

の判断だ。

この場合は、一体どれにあたるのだろうか。

激しく動揺していてアルディアンナは思考が纏まらない。

混乱するアルディアンナにシエルファイスは癖のある笑みを見せた。

「クレイレ領もご心配には及びません。我がラングランド家が支援致します」

「どうして……そのようなことを？」

アルディアンナの心残りはその一点だ。

その申し出は本来ならばありえない、全く関係のない家柄なのに。「我が主の望みだからですよ」

王家にも近いラングランド家が『我が主』と敬う人物。

アルディアンナの考えが正しければ、その人物はこの国で一人しか居ない。

しかし様々な疑問が残り、決め付けるのは早計だ。

「あのラングランド様の主様とは一体……」

「それはお会いしてからのお楽しみにしましょう」

シエルファイスは人差し指を口元に宛がい、声はとても愉快そうだ。

それでいて曲者のこの男は、きっとアルディアンナの一番知りた
い疑問には答えないだろう。

疑惑な眼差しで見つめていたら、シエルファイスは突然立ち上がる。

「それでは行きましょうか、我が主のもとへ」

急に手を差し伸べられたアルディアンナが驚いて動けなくなるのも無理はなかった。

知らない予感

どうやら王都へ向かっていらしいというのはすぐに解った。

いつの間にかに手配されていた数人の侍女に世話をされながら馬車での旅で、王都まで一日はかかるためか途中休息のためにとある館に立ち寄る。

王都と然程離れていないその館は、シエルファイスの持つ別荘のようなものらしい。

それでも、アルディアンナの実家とは比べ物にならないほど壮麗であり格式高かった。

休息のためと手厚く歓迎される一方で身に余る贅沢であり、この滞在のための数日間アルディアンナはずっと居心地が悪い。

勿論善意であることはわかっていたのでその態度は出せないが、知らず知らずに息を吐く。

「……どうされましたか、アルディアンナ様」

その中でも、一番アルディアンナの近くで世話をしてくれているリザが心配そうに伺う。

慌てて、アルディアンナは笑顔を作った。

「いえ、なんでもないです……それより、様付けは止めてくれませんか？」

聞けばリザは、下級貴族の出だそうだ。

嫁ぐものも居れば、女性でも稼ぎに出る者もいるこの国では珍しくない。

学があれば家庭教師、力があれば女騎士、その中でも一番手っ取り早いのは上級の貴族の侍女だろう。

しかしいくら女性の活躍が目ばしいとは言え、やはり男性重視であるから結婚も重視される。

地方は特に顕著にその傾向で、働きに出ることはなかったし実際に働いている人は見たことがないが。

「それはできません。アルディアンナ様は我が主の大切なお方ですから」

アルディアンナが何度言っても、こう言っただけ聞き入れることはない。

リザに限ったことではなく、他の侍女達もそうだ。

こんなときアルディアンナは心苦しくてたまらない。

本来なら自身がその立場であってもおかしくはないのだから。

それでも、何度目かのやりとりでようやくアルディアンナも諦めぎみだ。

そのかわりに、もう一つのわだかまりも切り出す。

「では、お願いがあります」

「なんでしょうか」

「食事の時は……いいえ、せめてお茶の時は同席していただかせんか？」

アルディアンナの言葉に、リザは目を丸くする。

本来令嬢は使用人と共にすることはないはずであり、リザだってそうだった。

いくら地方の子爵とはいえ、アルディアンナもそうではないのだろうか。

リザの表情には隠しきれない疑問が浮かぶ。

「私の家では貧乏だったんで、節約のためにも皆と一緒に食事を取るんです」

少し恥ずかしそうに苦笑するアルディアンナに、少々吃驚した。

どうやらリザの知る令嬢とは毛並みが違うらしい。苦い記憶が脳裏を掠めそうになるが、笑顔で押しとどめる。

さて、どうしようかと考えた。

リザはアルディアンナと然程歳は変わらないが、14歳の頃から働きに出ている。

侍女としては、主人に近いアルディアンナに小言を言わなければならない。

しかしアルディアンナは『命令』ではなく『お願い』と言った。ならばこの数日、我が儘も主張もなかったアルディアンナのために折れようと決心がつく。

「……では、シエルファイス様と主様がいらっしやらないときにはご同席させていただきます」

こっそり秘密めいて笑顔を作ると、アルディアンナも嬉しそうに表情を綻ばせた。

その笑みを見てみると、こちらも何だか心が温かい。

「では、アルディアンナ様。私のことはどうか、リザとお呼びくださいね」

リザの言葉に、今度はアルディアンナは固まる。

初めて会ったときから、リザのことを「リザさん」とさん付けて呼ぶ。

確かに今までの実家では使用人をよぶときに敬称をつけても構わないが、今後はそうもいかない。

今はまだ事情は話せないが、今後のアルディアンナのことを考えれば今のうちに慣れておく必要がある。

シエルファイスにも、遠まわしにだがアルディアンナのこれからのことを言い含められた。

……きっと、アルディアンナはこのままではいられない。

どんなときでも、アルディアンナの傍に控えようと密かに心に決めた。

アルディアンナには数日間ですごい思わせるだけの魅力がある。

誰もが羨望する美姫ではないけれど、アルディアンナには凜と美しい瞬間があるのだ。

「……解りました。努力しますね、リザ」

困ったような笑顔のアルディアンナに、自然と微笑が浮かぶ。

さて、紅茶の用意でもしようかと時計を見るといい時間だ。

ちょうどその時、部屋に誰かが入ってきた。

「今日は、アルディアンナ嬢」

突然のシエルファイスの登場で、驚きつつもリザは一步下がり礼を取る。

アルディアンナもそれに倣おうか迷っているうちに、シエルファイスがリザを下がらせた。

リザが退出してしまい、心細い。いつもシエルファイスの前になると言い知れぬ不安に苛まれる。

「こちらでの滞在に不便はございませんか？」

この館の主は、シエルファイスだ。

彼がアルディアンナのために、何から何まで手配してくれるお陰でアルディアンナは穏やかな生活を送っている。

そのためのお礼を言っていないことに気付いた。

「いいえ、私には身に余るようなことばかりで……ありがとうございます」

「いえ突然こちらに連れてきたのですし、貴女は大切な預かりものですから」

あくまでシエルファイスは、彼の主の言いつけどおりなのだろう。悪意は見えないが、正体のわからない今居心地は決して良くない。何度問うても質問には答えないので、『主』の正体も目的さえもアルディアンナは諦める。

「こちらの用意が整いましたので、申し訳ないですがまた馬車の移動になります」

シエルファイスはアルディアンナをこの館に連れてきて、直ぐにどこかへと居なくなった。

この口振りだと、準備をしてきたということだろうか。

「……ひとつだけ、どこに行くかは教えていただけませんか」

アルディアンナの不安を見抜くように、シエルファイスは一癖ありそうな笑みを浮かべた。

温和な雰囲気だが、一癖も二癖もある。

この国の宰相を輩出する家柄の人物に気を抜いてはいけなかった。
「王都、とだけ申しましょうか」

どこか、アルディアンナは予感している。

それでもその思考を追いやって考えないようにした。今はまだ知るときではないからと。

一行は王都までは半日掛けて、移動することとなった。

王都での再会

シエルファイスの館から再び野馬車は快適だったが、王都に入り窓は目隠しがされて結局どこに連れてこられたか解らない。

あたり見渡しても全体が見えてこないほどの立派な宮殿のようなところで降ろされ、見たこともない豪華絢爛な建物にアルディアンナは恐縮していた。

アルディアンナの部屋だと通された部屋でさえ、実家の何倍の広さだろうかばかり知らない。

テラスからは緑溢れる美しい庭園が見える。それだけが、唯一故郷の自然を思わせて心が和んだ。

「お気に召されましたか、アルディアンナ様」

「私には勿体無い部屋です……」

珍しく楽しげなりザの問いに、半ば茫然と呟く。何もかもが想像以上だ。

一目でシエルファイスの別荘より、内装は高雅であり凝ってあるのは解った。

実家からの道中ずっと一緒だった侍女のリザはどうやらそのままアルディアンナに付くらしい。

本来ならアルディアンナが侍女側になってもおかしくないというのに、という困惑があった。

戸惑うアルディアンナの言葉にいつも決まってリザはにっこり笑う。

「いいえ、アルディアンナ様は我が主の大切なお方ですから」

「……でも」

「さあさあ、旅でお疲れでしょう。湯浴みの用意が来ております」
この話は仕舞いだといわんばかりに手を叩くと、控えていたほかの侍女がりザの後ろに控える。

それを見てアルディアンナは嫌な予感がして後ずさりしそうになるが、無論リザが許してはくれない。

貧乏貴族で自分のことは何でもしてきたアルディアンナにとって恥ずかしくてたまらない入浴となった。

それから数日経っても、皆が口を揃えて言う『主様』は姿を見せなかった。

初めの頃、何かの合間に挨拶に来たシエルファイスの言葉によると今多忙らしくこちらでアルディアンナと対面する時間はないらしい。

何とか時間を作るので待っていたきたい、と懇願されるが、元よりそのつもりでここに居る。

少々安堵したという本音もあるが思いがけずに出来た時間はアルディアンナにとって、ゆっくりと流れた。

まず何から何までしてくれる侍女がいつも身近に控えているので、直ぐに世話を受ける側行う側の差など気にせず仲良くなった。

また時間があるので、自然に囲まれていた領地を思い出しては庭園を散歩する。

そこを管理している庭師と仲良くなるのも早かった。

自身が稼ぎに出たことはないが、趣味は貴族の娘らしからぬ庭園いじりであり領民の田畑の世話なども良く手伝っていたので草木の世話には詳しい。

深窓の令嬢ではなく、ましてや王都にいるような姫のようでもないアルディアンナは不思議だとリザは思う。

明るく優しいアルディアンナの存在は、まるで花が咲いたようだった。

その日ももしかしたら来訪があるかもしれない、という理由で多

少着飾った。

なんとしても宝石類は固辞したので、服装は見た目こそ質素だが薄橙色のドレスは良く似合っていると褒められた。

それでもこの質素に見えて高級なドレスも、今までアルディアンナは縁がないはずのものだ。

実家を出発してから、アルディアンナでは到底考えられない値段のドレスを着せられているが、未だに慣れず汚さないように気を配って張り詰めている。

侍女たちの半ば人形のように成すがままになりつつ用意してもらうも、結局待ち人は来ずアルディアンナは一人庭園を散歩していた。

ここに来てから初めの頃は何をするにも侍女の誰かが付いて回ったが、今は信用されているのか一人でも許されている。

庭園に備えられている木製のベンチに座ると、ふうつと小さくため息が零れた。

正直この最近のこの生活は、何もかもがアルディアンナの身の丈にはあっていないと感じている。

アルディアンナはただあの自然溢れる領地で、みんなと暮らせればよかった。手を伸ばせば、草花が摘めるそんな地を愛していた。

この庭園はそんな領地に少し似ている。

だからこそアルディアンナの部屋はここなのかもしれない。その考えが間違っていないければ、『主様』も決して悪い人ではないはずだ。

そう思うも、やはり正体不明な不安で時々押しつぶされそうになる。『主様』の正体や望みもシエルフェイスやリザ達の秘密めいた言動や期待も、アルディアンナには解らないことばかりだ。

ぼんやりとアルディアンナが物思いにふけっていると、かざりと草木を踏みしめる音がした。

リザが呼びにきたのだろうか。慌てて音のほうを見るが、リザではなかった。

長身で貴族の礼服に似ているが少々違った服を纏っていて、一目見るからに高貴な雰囲気を漂わせている。

日に当たりキラキラと金色に輝く長く束ねている髪が視界に入り、次にその男の顔を見ようとそちらに移った。

男の端麗な作りの面立ちを見たときに、アルディアンナは息を呑む。どこかの完璧に美を追求した芸術品を見ているような感嘆がもれそうだ。

アルディアンナも一瞬見惚れて、こちらを穏やかに見つめるアイズブルーの瞳と目が合った瞬間に思い出が重なる。

あの最後にあつたときはまだ少年の幼さを残していたが間違いない。

「クラウド……？」

何度会いたいと望んだことが、数知れない。

待つのではなく会いに行こうか迷うところで、一体どの誰なのかを知らないことに気付いては後悔していた過去が過ぎる。

あんなにも話していたのに自身が何も知らないことに気づき、大人に近づくにつれ自然と諦めもついていた。

それでも今だけは何もかもを忘れ、アルディアンナはその人物の元へ駆け出していた。

花の檻

気が付いたらドレス姿にも関わらず、その人物まで駆け寄っていた。

その人物もアルディアンナを受け止めるかのように、柔らかく微笑んだ。

記憶にあるよりも落ち着いている印象だが、間違いないと確信し名を呼ぶ。

「クラウ！」

「そうだ、アディ……久しいな」

クラウが腕を広げアルディアンナを包み込む。

一瞬だけ固まるも素直にアルディアンナもクラウの腕の中に納まり背に手を回した。

最後に会ったときはアルディアンナの拳一つ分の高さだったが、

今はクラウの胸の辺りに頭がある。

「クラウ、あれから大きくなったのね」

「アディは大分淑やかになったみたいだな」

からかう様な口調のクラウに、アルディアンナは顔を上げ軽く怒って見せた。

しかし直ぐにそれが笑い声が変わって、二人とも名残惜しそうにしてから一歩離れた。

それでも二人の手はつながっていて距離も近い。

「でもどうしてクラウが……」

アルディアンナが無邪気な笑顔のまま疑問を問いかけて、はたと今の自身の状況を思い返した。

咄嗟に手を離し距離を置こうとしたが、クラウがしっかり握って離れない。

愕然とした様子で見あげるアルディアンナを予想していたのかクラウは苦笑を返した。

「まさかクラウは……」

「陛下！」

問い詰めようとしたアルディアンナの声は突如クラウの背後から遮られた。

アルディアンナに向けられていた穏やかな眼差しは呼びにきた兵士に移され、それは冷たく鋭いものだ。

その視線を直に受け、自身の過ちに気付いた兵士はすぐさま地に膝をつけ頭を下げる。

「申し訳ございません！」

「よい、不問と致す。しかしこの場から即刻立ち去れ」

厳しいクラウの言葉に兵士は礼をとって、急いで立ち去っていくのがクラウの姿越しに見える。

アルディアンナも距離をとろうとしたが強く手をとられたままだ。鋭さのなくなったクラウの視線がまたアルディアンナへと向けられる。

「クラウ……陛下つて！」

アルディアンナはできるなら声をあげて泣き出したかった。それかいつそ気を失いたい。

クラウの威圧的な先程の態度に違和感はなく、また『陛下』をさすのは考えられる中で一人しか居なかった。

それでも逃げ出すことが出来ないのは、蜂蜜色の面影から悲しそうに揺れていたアイスブルーから目が放せないからだろうか。

見つめるクラウは、アルディアンナが知りたがっていて知りたくなかった真実を告げる。

「そうだ、私はクラウディード・フィルディール……アウリス。

この国の王だ」

予想にしていたが、本人から直接言われると改めて現実であることに衝撃を受けた。

頭が真っ白になっているアルディアンナは辛うじて呟く。

「……ここはどこなの？」

「ここは王宮、後宮の中だ」

後宮が王の妃が住まう宮だというのは、アルディアンナだって知っている。

そしてここに居ることの意味も。ただどうしても自身がここに連れてこられた理由は解らない。

叫ぶようにクラウに縋りつく。

「どうして！？どうして……」

「ずっと会いたかった、アディ」

クラウがアルディアンナの頬にそつと触れる。

愛しそうちにこちらを見つめる瞳にアルディアンナも飲まれそうになるが、ぎりぎりのなかで自身を保つ。

蕩けそうなクラウの声は、アルディアンナにそつと囁く。

「私の元に、傍に居てくれ」

懇願にも似ているが、拒否を言わせぬ声色だった。

咄嗟に、かぶりふって自身の心を強く叱咤する。

「無理です！」

「無理ではない。アディが結婚をすると聞いたときから決めていた。いつそ、誰かの者になるくらいなら私が貰う」

頭を横に振りはつきりと拒絶するも、クラウは益々アルディアンナを腕の中に閉じ込めた。

到底受け入れがたく、信じられなかった。

クラウのことはずつと好きだった。初めて出会った幼い時、一目で落ちて囚われていたのかもしれない。

それでも、アルディアンナには身分制度やこの国のことが頭から離れない。

何よりも愛する故郷さえも捨てられないという思いは強かった。

「……私のことは嫌いかな？」

寂しげなクラウの声にアルディアンナは俯いた顔を上げる。

あの日と変わらないアイスブルーがかち合う。

思わず本心が少し漏れた。

「き、きらいではないわ。でも」

受け入れることはできない。

王の妃など、側妃でもアルディアンナには考えられない。

困惑しているアルディアンナに、クラウは優しく穏やかな笑みを向ける。

「ならばよからう。こちらでは不自由はさせぬ……愛している」

決まってしまうことに啞然とするアディに顔を寄せ、自身の唇を重ねる。

突然のことになされるままで、満足したのかクラウは離れる。

「さて少々抜けてきたから行かねばならぬ」

いつの間にかに傍には侍女のリザが居て、頭を下げて待っていた。そちらにクラウが違和感なく指示を出すと、リザは心得ているかのように頷く。

もう既に為政者の顔をしている。やはり、これは夢でないことをアルディアンナに突きつけているようでもあった。

「またすぐに来る、アディ」

そつと頬を撫でて耳元で囁く言葉は甘いのに、背筋がすつと寒い気がした。

いつの間にかに遠くには近衛兵はおり、そちらの方へ向かう。おそらくクラウを迎えに来たのだろう。

アルディアンナは声も出ないほど、固まったまま見送るしかなかった。

そしてやがて気付く。

この宮はアルディアンナを囲うものだと。

ひっそりと、花は囚われていく。

王妃の秘密（前書き）

過去から、現在に繋がります。

この話から一部作中の人物の呼び方も変わります。
解りにくく申し訳ございません。

王妃の秘密

ふっと意識が浮上するような感覚がして、アルディアンナはいつもより早い時間に目が冷めた。

懐かしい夢を見ていたようで、一瞬自身がどこにいるのか解らず戸惑う。

しかし直ぐに、状況を思い出して吐息が漏れた。

胸元を見ると脱がされたドレスはいつの間にか寝間着に変わっている。

隣にはもう既に誰もいないようだが、恐らく彼が着せたのだろう。初めの頃は恥ずかしくて居た堪れなかったが、もう何も感じない。

目が覚めたけれど、まだぼんやりとする頭で部屋を見回すと、バルコニーに備え付けられているカーテンが揺れていることに気付いた。

珍しく開いているバルコニーの方へ向かうと、そこにはいつも目覚めたら居ないはずの人物がいた。

「クラウ……」

朝出たばかりの日の光が金の髪を照し、それを眩しそうに目を細める。

こうして日の光に居る人は、別の世界の尊い存在のようだ。アルディアンナは思うがその思考は遠くに追いやった。

改めて観察すると剣の鍛練だろうか。一通りの剣技の型を取っているようにも見えるがどういった動作の意味かアルディアンナには解らない。

ぼんやりと見つめていると、クラウディアードがバルコニーの傍に立っているアルディアンナに気付いた。

「アディ、起こしたか」

アルディアンナは否定の意味を込めて小さくゆっくりと横に頭を

振る。

クラウドディアードは剣を腰に付けていた鞘に納め、アルディアンナの傍に寄った。

そしていつものように頭を撫でる。いつもなら拒絶するそれも、何故だか心地よい。

「もう少し寝るか？」

また否定の意味を込めて小さく横に頭をふる。

もう日は出ているが、まだ辺りは静かで起きる時間には早い。従者だつてようやく起きだした頃だろうか。

いつもなら目覚めることの少ない時間だが、アルディアンナには眠気はなかった。

「ならば散歩をしないか？」

クラウドディアードの提案に、素直に頷く。

いつもなら少しでも離れたいと思うのに。クラウドディアードが手を取って歩き出しても逃げることなく従った。

二人に朝の日の光が、降り注ぐ。

でたばかりの日は眩しくて、先程までバルコニーの屋根の下にいたアルディアンナは目を瞬かせた。

「こうやってゆっくり歩くのも久しいな」

クラウドディアードの声は穏やかだ。

アルディアンナに意味も無く甘く、それで居て残酷な声色でもない。

幼く肩を並べて歩いていたときのようにゆっくりとしている。

「……そうだね」

「今日は珍しくアディの機嫌も良いみたいだな」

クラウドディアードを咄嗟に見ると、まるで悪戯っぽく笑っている。こうやって軽口を叩くのも、こうなる以前の時のようだ。

錯覚してしまいそうで、アルディアンナはクラウドディアードから視線を逸らした。

「ねえ、クラウド……ベアティミリア様のところにはいなくていい

の？」

アルディアンナとて何も知らないわけではない。

国王陛下には美しい妃がおり、二人は誰もが憧れるお似合いの夫婦だと聞いている。

それなのに陛下はアルディアンナのところばかり居るような気がした。

もしかしたらアルディアンナの知らないところで、二人は会っているのかもしれない。

少しだけ胸が痛むような気がしたけれど、アルディアンナはそれに気付かぬふりをした。

「ああ……」

アルディアンナの質問にクラウドディードは笑みを消し、途端に無表情になった。

こうしているクラウドディードはぞつとするぐらいに冷たい。面立ちが美しいからこそ、迫力も数倍に感じる。

内心アルディアンナは怒らせたかと思うと恐ろしくなったが、今更自身の発言を消すことは出来ない。

そんな不安に戸惑うアルディアンナを察したのか、クラウドディードは表情を和らげるように変えて苦笑した。

「いや、すまない。ベアティミリア……との話をしていなかったな」
クラウドディードは庭園に備えられているベンチに座るように勧めた。

アルディアンナが勧められるままに座るとクラウドディードも隣に座る。最初から繋がれた手はそのままだ。

「アルディアンナ、私が愛しているのは真実お前だけだ」
手の甲にキスを落としながらの突然の告白にアルディアンナは驚く。

熱が籠ったように見つめる真剣な表情のクラウドディードに嘘偽りは見えない。

アルディアンナとて嬉しくないわけではないけど、やはり身分に

拘ってしまふし身分だけではなく似合っていないことを知っている。だからどうしても素直に受けとめるわけにはいかないアルディアンナはいまだ『柵の中』にいた。

そんな反応の返さないアルディアンナに少しだけ寂しそうな笑みを見せるが、クラウディアードは言葉を続けた。

「ベアティミリアのことは好いてはいるが愛してはいない。そしてベアティミリアも私のことは愛していない」

クラウディアードの言葉に、アルディアンナは首を傾げる。

その言葉は不可解で、何度頭の中で繰り返してもアルディアンナには理解できない。

怪訝な表情をしてもクラウディアードは語るのを止めず、解るように慎重に言葉を続ける。

「ベアティミリアとは婚姻が取り成される際、私たちは盟友である」と誓った」

アルディアンナの知らない昔を思い返しているのだろうか。

クラウディアードは懐かしげにはいるが、それは決して楽しそうな表情ではなかった。

年に何度かしかない逢瀬でしか、アルディアンナは『クラウディアードという人』を知らない。

今だって、目の前に居る人は夢のようなのだから。

それこそベアティミリアの方が相応しいのではないかと思ひ浮かぶが、次の言葉でその考えも飛ぶ。

「私たちは互いを愛し合つて婚姻を結んだわけではない。ベアティミリアとは幼馴染であるが彼女との間に愛は生まれなかった」

クラウディアードは淡々と語る。

あまりにも落ち着いた言葉に何でもなさにも思うが、もしかしてこれは聞いてはいけないことではないだろうか。

それでも、クラウディアードの言葉を待つことをやめなかった。

「ベアティミリアには他に愛している男がいる」

本来ならばありえない事だ。
真実に、ただアルディアンナは言葉を失っただけだった。

誰が為に

「ご機嫌麗しゅう、陛下」

クラウディアードは目の前の男を胡散臭そうに一瞥した。

王の執務室には王であるクラウディアードと側近のシエルフェイス、そしてこの目の前の男だけだ。

本来ならば謁見の際近衛兵が控えているのが常だが、それも目の前の男が人払いをした。

クラウディアードもそのように指示したので、近衛兵は従うしかないが心配は要らない。

謁見を申し出ている男こそ、王の警備を受け持つ近衛団の將軍職を持つからだ。

「……お前にそう言われるのは気色が悪いな」

鼻の頭に皺を寄せながら、不機嫌に言い放つ。

それでも男は害した様子も怯える様子も見せずに、むしろ飄々としている。

二人の間に立つシエルフェイスはいつもの二人の挨拶のような出来事に苦笑を見せた。

「ヴォルフエルム、陛下の御前で無礼ですよ」

シエルフェイスが嗜めても男は、ヴォルフエルムは一癖ありげな笑みを浮かべている。

人によつては得体の知れないと感じるが、付き合いの長いクラウディアードには大体何を考えているのかを想像するには容易い。

シエルフェイスもそうなのだろう。もう口を挟む様子もなく、傍観を決め込んでいる。

「シエルフェイス、今更だ。さて何用かさつさと申せ」

ヴォルフエルムはわざわざ近衛団將軍として、国王陛下に謁見を

申し込んだ。

その意味は大きく、警備を任されていた近衛兵も戸惑いを隠せない様子だった。

しかしクラウディアードは然程動揺した様子は見せず、それどころかヴォルフエルムの謁見の目的さえも解っているようだ。

「……いえ、ちょっと確認したいことがあります」

肩を疎める素振りがなんとわざとらしい事か。

クラウディアードはヴォルフエルムの動作に目を細めるが、続きを促した。

「我ら近衛団は陛下に忠誠を誓い、騎士団は王の伴侶を守ることで忠誠を示す……我が国の王家の仕来りをご存知ですか」

アウリス国の長い歴史の中で、いつの間にかそうなった。

実しやかに騎士団は、昔王妃を『不慮の事故』で亡くした王が作ったとも言われている。

真相は不明だがそれ故にか騎士団は武芸だけではなく、礼儀作法も求められ実際に礼儀正しい者が多い。

なんにしても、騎士団で守られるべき人物こそが王妃の証であると根深く認識されていた。

「それが？」

「貴方のご寵妃は、『我らがお守りすべき人物』かはつきりさせて頂きたい」

ヴォルフエルムの問いに、クラウディアードはすぐに答えようとしなかった。

ただ肘掛に肘をつき口を閉ざし、ヴォルフエルムを見据える。

じいつと見つめる瞳は空虚のようにも知略が巡らされているかのようにも見えた。

観察に長けたヴォルフエルムもシエルフェイスも、今何を考えているのかは読めない。

ただヴォルフエルムよりも事情を知っているシエルフェイスのほう、想像する答えは近いだろう。

「……今は未だ、最優先で守れ」

ぼつりと零すように出た言葉に、ヴォウフェルムもシエルファイ
スも反意は湧かない。

それどころか充分だったのか、問いかけた方であるヴォルフェル
ムの笑みは深くなる。

「では、寵妃アルディアンナ様に我ら近衛団は命を賭けましょう」
優雅に礼をするヴォルフェルムも、元は貴族の子息だ。

貴族の子息ながらに武官となり力がものを言う近衛団で、あくま
で実力で將軍までのし上がった。

今では次期近衛団の団長として名を挙げられるほどだ。

そして同じく貴族の子息で竹馬の友とも言える相手の騎士団に属
しているエリクシエスとは良い友人でライバル関係にもある。

ヴォルフェルム、エリクシエス、クラウドディアードの三人よりは
年上だが、シエルファイスも幼き頃からの付き合いだ。

そしてあと一人、美しく咲き誇る彼女も同じく。

だから分かり合えるところも大きいが、歳を追うごとにそれぞれ
の『望み』を叶えるのは難しい。

「もう一つ申し上げたいことがあります」

まだあるのか、という煩わしそうなクラウドディアードの視線を受
け、にやりと笑う。

それを見て嫌な予感はあるが、ヴォルフェルムの動作を待った。

「これを」

そういつて渡したのは手紙だった。

受け取りそれを広げ視線だけで読むと、内容にクラウドディアード
は眉を寄せる。

ちらりとヴォルフェルムを見やってから、傍に控えているシエル
ファイスに手紙を渡す。

受け取り読んだシエルファイスも一瞬だけ目を見開いき、苦笑に
似た表情をした。

「勿論先程誓ったようにアルディアンナ様の御身は命に代えてもお

守ります」

「これの為、という訳か……シエルファイス」

呼ばれたシエルファイスは解っているかのように頷く。

どうあれ、この日が来ることは予想できた。

ただこういう不意を付いてくとは思わなかったが。

「アルディアンナの支度はお前に任せる……これで満足か、ヴォルフエルム」

やはり事はこの男の思い通りか。

視線を受けたヴォルフエルムは油断のならない笑みを浮かべて一礼する。

手紙には正式に、ベアティミリア・フィーネリアの名でアルディアンナ・クレイレを招待する旨が書いてあった。

アルディアンナが断りにくいように、クラウドに宛てるのはどちらが言い出したことなのか。

それは解らないが、ベアティミリアがアルディアンナに会いたがっているのは確かだろう。

その時必ず会わせると以前約束をしていたのも、クラウドにドだ。

これは避けられぬ道……クラウドとベアティミリアが選んだこと。

「お前の命に賭けて守れ……ベアティミリアの茶会を許可する」

話は終いだ、と言わんばかりにクラウドは溜まっている書簡を広げだす。

こうして話しているうちにも、国王決裁の書類は溜まっていく。クラウドの命により、シエルファイスとヴォルフエルムは王の執務室を退室する。

「……何を考えている？」

鍛練場へ向かうというヴォルフエルムを見送りがてら、シエルファイスは切り出す。

王の前でなければ、歳も身分や立場もシエルファイスの方が上だなによりヴォルフエルムがシエルファイスには自身の考えを話すことが多い。

「別に？俺はただ頼まれただけだ」

相手が上だろうがそんなことを構うわけもなく、馴れ馴れしい口調で惚けてみせた。

これも今更であるし特に気にも留めないが、シエルファイスはぴたりと歩みを止める。

「……ベアティミリア様に？」

「エリクシエスを通してだが」

エリクシエスの名が出てきて、一つシエルファイスは納得する。

そして幼い時から彼らを知っているからか、ここにいたった経緯に自然に笑みも浮かぶ。

「相変わらず甘いな。君もエリクシエスも」

「ああ、そりゃ……幸せになって欲しいからな」

飄々としつつも、その言葉は真剣で偽りはない。

誰が、とも今は聞く必要もない。

シエルファイスとて、思いは同じだ。

ただクラウドディアードに近いのは自身も認めるし、忠誠心にも似たこれは今後も変わらないだろう。

「ヴォルフエルム、君はベアティミリア様と陛下が一番最良と考えるか？」

シエルファイスの言葉に、意外にもヴォルフエルムは肯定も否定もしなかった。

やはり、曖昧な笑みを浮かべつつ肩を竦めるだけだ。

ヴォルフエルム自身まだ迷いがあり見極めきれないのだろう。

「ならば、アルディアン様にお会いすると良い」

このまま決めてしまっただけではフェアではない。

それに、シエルファイス自身アルディアンナに何か期待しているのかもしれない。

今はまだ解らないが。

提案にヴォルフエルムも一つ頷く。そういえば一度も見たことがないことに気付く。

「では、シエルファイス殿。私はこれにて失礼します」

わざとらしく挨拶をしたのち鍛練場の方へ行くヴォルフエルムを見送った。

ヴォルフエルムは本来ならば、武官でなくとも充分通用する賢さを持っている。

だからこそ、見極めて欲しい。

そう願うのは、やはりクラウディアードの思いに同情してしまっただからだろうか。

シエルファイスは苦い笑みを禁じえなかった。

余話：幼き頃の追憶（前書き）

お読みいただきましてありがとうございます。

突然ですが、余話を入れさせていただきました。

陛下とある側近のお話です。側近視点で、本筋には微妙に絡んでいないような絡んでいるような話となっております。

シリアスではなく今までの流れとも違いますので、ご注意願います。

今後三章が終わり次第、二章に組み込もうと思います。

三章を始める前に掲載できず申し訳ございません。

余話：幼き頃の追憶

私はシェルフアイス・ラングランド、現在は陛下の側近として働いている。

正式には政務官であり、陛下の采配がよどみなく行われるようにするための補佐だ。

実は陛下とは、まだ王太子であつた頃から仕えており所謂幼馴染のようなものである。

だから陛下に対しての些細な無礼も大目に見てもらえるし、自他共に認めるように陛下からの信頼も厚い。

初めて謁見が叶つた歳は、陛下は8歳、私は12歳のときであつた。

私の他にも、当時妃候補であつたベアティミア様を含めた何名かもお傍に付いた。

これは前王妃の采配である。お体が弱い前王妃は陛下が寂しい想いをされないようにという優しい心遣いだ。

「面を上げよ」

前国王の側近である宰相閣下が恭しく、頭を下げていた我々に声をかけた。

宰相閣下は実の父親ではあるが、私が宰相になることはない。次は別の公爵が勤めることになっている。

これは貴族間の軋轢をなくし、無用な争いをなくすためだ。

何代か前の国王陛下が取り決め、貴族側も承認し持ち回りで役職を移動し権力が固まらないようにしている。

といつても多少の権力関係はやはり残る。私が次期国王である王太子の側近になることは内定済みだ。

私を筆頭に、皆が頭を上げるのを背後で感じた。どうやら年代的にも私が一番年上らしくその関係でまとめ役も仰せつかった。

「……お前たちが私の遊び相手か」

宰相閣下の隣には王太子がいる。視界に入つた瞬間誰もが息を呑んだ。

金の髪を持つその御方は、幼いながら目の覚めるような美貌の持ち主だった。

どちらかという可憐な面立ちのその方はまさに天使のようで、ベアティミリア様と並べたらさぞ愛らしいに違いない。

しかし12歳とはいえ、私に稚児趣味はないので一瞬だけ見惚れたにすぎない。

ちらりと背後を伺うと、数名はまだ王太子殿下に見惚れたままぽかんと口を開けている。

「殿下、お気に召しましたか」

「ただの遊び相手は要らぬ。おい、その者」

視線の先に立ったのは勿論私だった。

見た目に反して挑むような視線が印象的で、中々に気のお強い方なのだろう。

年下とはいえ、相手は王太子殿下。失礼のないように頭を下げて答える。

「シエルファイスと申します」

「宰相の息子であつたな。そなたはどこまで学術は習得している？」

「一通りは終えております」

私はこう見えて一通りは叩き込まれている。

父が厳しいというのもあるし、私自身が学問に向いているというのもあるだろう。

その代わり、武術に関しては父も匙を投げてはいるが。

「そうか、私は一つでも多く学びたい。私の為に知識を活用せよ」

「クラウドディアド様、武術も怠つてはいけません」

父である宰相閣下の言葉に、途端に渋い顔をさせた。

王太子殿下の実年齢より小柄な身から察するに、運動の方はあまり好まれていないらしい。

むしろこんな華奢で可愛らしいお顔で筋肉質だったら泣けてくるが、王太子殿下の立場上軟弱過ぎても不味いものがある。

「良い、私が鍛えなくとも皆が守ればいいだろう」

そういつては武術の時間を度々サボられる殿下に周りのものが困ったのは語るまでもないだろう。

そのまま可憐な美しさを保ったまま、10歳の誕生日を迎えられる。

同じくこの頃、お体の弱かった王妃陛下はひっそりと静養されることとなった。

後宮には王妃が迎えられる前の側妃達があり、いくら陛下が王妃に寵愛を注いだとしても心は休まることはない。

側妃を降嫁されればよかったけれど……それは貴族間における勢力関係でできなかつたらしい。

本来ならば王妃は陛下に嫁ぐことは出来なかつたはずだが、それを陛下が曲げたため余計な軋轢が生じてしまった。

後宮の詳しい事情は知らないが、王太子殿下が幼いながらも寂しさを押し殺しているというのは皆が感じていることだった。

とある季節に行われている静養の予定より早い帰還となった殿下は何か考え事をしているようであった。

何やら静養地で騒動を起こしたらしい、とは聞いている。

それによって王都への帰還が早まり、国王陛下直々にも叱責を受けたいらしい。

仕方がないことだ。殿下はただ一人の王太子である。

どうお慰めしようかと迷っていると、殿下の方からこちらに宣言した。

「私は強くなるぞ！」

「クラウ殿下？」

突然だったが、殿下は固く誓ったようだ。

目を丸くしていると、こちらに苦笑をした。

それは今までのどこか自信ありげなというよりは、自嘲じみている。

「お前たちにとっても『良き友人』でありたいと思う……そのためには私は誇れる王でなくてはいけないな」

正直殿下は、どちらかというと言われる側の人だと思っていた。

しかしそうではない……この方は、立派に守る側に人だ。

「いいえ、殿下。身分は違えども私たちは貴方といつまでも『良き友人』でありたいと思っております」

私はもとより、王太子殿下の垣間見える思慮深さについていこうと誓っている。

この国はこの方が治めれば尚良い方へと行くであろう。

そのためにも私は役に立ちたいと心から思う。

「……そうか、礼を言う」

それに他の者も、大きくは思いは違えないはずだ。

私が一番接する時間は長いが、歳を言えばヴォルフエルムやエリクシエスらと同じであるから仲が良い。

二人からも、殿下を大切に思うからこそ強くありたい気持ちが伝わってくる。

恐らく武術に励むとなると一層二人は喜ぶだろう。

照れたように呟いた殿下に初めて近づけたように感じる。

それにしても突然嫌がっていた武術に励むようになり、身体を鍛えたことには首を捻るばかりだった。

精悍さが増すにつれ、度々ある少女について語ることも増えその

謎も解決されることになる。

……なるほど、よほど『間違われたこと』が屈辱的だったようだ。しかし年に数度しかない僅かな逢瀬の中で、主は幸せを見つけたように微笑ましかった。

そしてもう一つ予感があったが、今はまだ言わないでおこう。

私は陛下に忠誠を誓う一人なのだから、誰にとっても幸せな結果になることを強く望むだけだ。

近くて遠い二人

朝からアルディアンナは侍女がやけに騒がしく動いているのに気付く。

不思議には思うが問いかけることはせず、ただ黙ってその様子を眺める。

……あの朝から、この所クラウディアードはアルディアンナの元へは訪れていない。

そのことで確かに表面上は平穏だが、同時に胸が苦しかった。話を聞いてから、何度も心の中で反芻するがアルディアンナには本当に真実なのか見極められずにいる。

甘やかに囁かれるたびに、虚栄を張った心は傾く。それなのにもう一人の自分がそれを頑なに拒絶する。

クラウディアードの美しい瞳に自身が写ったとき、心が途轍もなく不安に晒された。

まだその不安の本当の意味は知らない。そこから先についてはまだ考えたくないと思いを停止する。

「アルディアンナ様」

唐突に侍女のリザが声をかけてきたので、考えるのを止めた。

俯いている顔をリザのほうに向けると、リザは柔らかに微笑んで佇んでいる。

「申し訳ございませんが、こちらに」

リザがアルディアンナの手を引いて、もう一つの部屋の方へ向かう。

隣接されているこの応接室にはいつも近衛兵がいて、逃げ出そう

としたアルディアンナの行く手を阻むのであまり使用したことがない。

居住については今までの部屋だけで事足りたが、こちらの部屋に態々連れてくるということは来客だろう。

知らず知らずの内に連れてこられた後宮にアルディアンナの知り合いはいないはずだ。

怪訝に思いながら入室したときソファーに座っていた人物がこちらを向いて、アルディアンナは驚きで目を見開く。

優雅な動作で立ち上がり挨拶をするこの優男は、アルディアンナを後宮に連れてきた人物だった。

「お久しぶりです、アルディアンナ様」

「ラングラド様……」

言葉を失くしているアルディアンナにシエルファイスは優しく微笑む。

一見は穏やかな印象だが、アルディアンナはもう見たままを信用できない。

啞然とした驚きから、すぐさま睨み付ける様に相手を見据える。

「どうぞ、シエルファイスとお呼びください」

「いいえ、私にはお呼びする理由はありません」

はつきりと怒りを顕にするアルディアンナを見守っていたリザは、内心驚きつつも喜ばしくも思った。

最近の様子では沈んでいるだけだったのに、こうやって怒りでも現せるほど正気は失っていないらしい。

対してシエルファイスは表情を変える事はない。

「アルディアンナ様」

「その様付けも止めてください……私はそのような身分ではありません」

間違いなくシエルファイスは公爵家の子息であり、アルディアンナは子爵で下の立場だ。

本来ならアルディアンナが同じ貴族であろうと上の身分のシエル

ファイスに対して傳くべきである。

頑なな言葉に、シエルファイスは今度は困ったように笑みを浮かべた。

「そういうわけにはいけません。貴方は私の主……国王陛下の寵愛を受けている妃であるのですから」

シエルファイスの言葉はまるで言い聞かせるような穏やかさだ。改めて事実を突きつけられたアルディアンナは言い返す言葉もなく、立っていられないほどの眩暈を感じた。

それでも何とか気を強く持ってその場に立ち留まる。

黙りこみ固まったアルディアンナはシエルファイスに促されるままにソファアーに腰を下ろした。

「貴女は陛下を受け入れる覚悟をまだお持ちではないですね」

「なぜ……そう言えるのですか」

アルディアンナには不可解でたまらなかった。

国王陛下の功績は、王都から遠い領地に居たアルディアンナにも微かにだが届いている。

そんな立派な御方が、特に目立たない貧乏貴族の娘に執着するのはおかしいことのはずだ。

「私にはそんな資格がないというのに！」

今にも泣き出してしまいそうなのを、ぎりぎりのところで踏みとどまる。

何も知らない人に涙は見せたくない、それはアルディアンナの意地だ。

あの頃からも遠かったのに、今では追いつけないほど二人の距離は遠い。

その距離をまざまざと見せ付けられているようで、いつも押し潰されそうだった。

「……貴女は自分が思う以上に必要とされていますよ」

アルディアンナの叫びを黙って受け止めたシエルファイスは呟くように言った。

それは決して同情の声色ではない。真剣そのものだった。

聞き間違えではないかとアルディアンナが顔を向けると、シエルファイスは穏やかな笑みを浮かべている。

「ベアティミリア様にお会いになってください、アルディアンナ様」
すつと懷から一通の手紙を差し出す。

それを受け取り開いてみると、アルディアンナには予想外の人物の名が記されている。

「彼女に会えば、きっと何かの答えの切欠になると思います」

「これが、切欠？」

ベアティミリアからの茶会の招待状。

王妃に最も近い者と、王から寵愛を受ける者。

二人は近いようで遠い関係であり、同席など考えられないはずなのに。

それが意図することはどういうことだろうか、アルディアンナには解らない。

咄嗟に断ろうとするも、シエルファイスの言葉によって断たれてしまう。

「王からアルディアンナ様の支度を仰せつかいましたのでご安心を」

「あの方は……陛下は許されたのですね」

ベアティミリアとクラウディアードの間には、アルディアンナでも立ち入れない密やかな絆がある。

だからこそ許可するのは納得できるが、その思惑までは解らない。悔しさに似た思いに唇を噛むが、アルディアンナが何を言おうと

これは決定事項だ。

シエルファイスの来訪のことかと思っていたが違う。

ベアティミリアに対しての用意のためなのだろう。

「ええ、諦めて覚悟をお決めください」

につこりと笑うのは、やはり曲者のようだ。

目まぐるしく動く事態が、ぼんやり過ごしていただだけのアルディアンナには厳しく降りかかる。

まだ覚悟は出来ていないが、待つてもくれない。

アルディアンナの意思を無視するかのように、茶会のためのドレスが並べられる。

……心なしか、アルディアンナ付きの侍女たちは浮き足立っているように見えた。

普段仕える相手が着飾ることが少ないからだろう、とシエルファイスには解ったが特に諫めない。

あつという間の目の前の光景に疲れたようにため息をつくしか、アルディアンナには出来なかった。

この日の明日後、王妃に近い妃と王の寵愛の受ける妃が対面する。それぞれが思惑を抱えたまま茶会は行われるだろう。

どのように作用しえるかは、まだ誰にもわからない。

少女の園

季節によつて様々な花が咲き誇る豪奢で優美な庭園の中に、少女だけの秘密の園があつた。

幼い少女には果てしなく広く感じる宮殿の美しい箱庭のような園の隅の、まさに隅つこともいえるような場所。

小柄な身だからこそ見つけることが出来たそこは、大人が見つめることは難しい。

幼いながらに羨望のまなざしを受ける少女だけの憩いの場所だつた。

毎日は来れずとも日に日に回数は多くなるばかりで、そろそろ侍女にも不審に思われてしまう。

もし発覚したらどのような叱責や失望を受けるか解らない。

だけど少女にはその侍女達から逃れるためにはこの方法しか知らなかつた。

まるで日にかざすと黄金のように輝く髪が、まるで宝石のように輝く翡翠色の瞳が、まるで精巧な人形のように愛らしい面立ちがきらいだつた。

世話をする侍女は少女の目の前に立つと、そうやっては口々に褒め称え羨む。

そして一通り褒め終えた最後には「まさにお似合いですわ」と皆が満足げに微笑む。

言動に嘘偽りはないが、少女にとって褒められれば褒められるほど見えない鎖で絡め捕られているように感じていた。

本当は褒められたいわけではなかつた。少女が本当に望む物を侍女は決して与えてくれない。

だから少女はこつやつて度々逃げ出してしまふ。

その日も、やはり少女だけの秘密の園に逃げてきた。

最近は耐えきらず宝石のような翡翠の瞳を濡らしてしまうことが多い。

少女はいつだってただ一つを切望していて、それが叶わなくて悲しくて泣いてしまう。

歳など関係なしに少女は生まれながらにして期待されている存在だから、少女の願いは叶わない。

幼いながらその事実を知ってはいるが、受け止めることは出来ずにいる。

ここは少女の秘密の園。少女の『孤独の園』でもあった。

「なぜ、泣いているの？」

少女の秘密の園を破ったのは少年の方だ。

風に乗って聞こえてきた声を追いかけた少年は少女よりは二つばかり年上だが、発育途中の幼い身体が少女だけの園を見つけることが出来た。

少女は突然の声に驚いて動くのを忘れるが、少年の漆黒の瞳と合っ
て慌てて涙を拭う。

「あなたには関係ないわ」

少年の顔は知ってるのに、少女と境遇は近いのに、まるで状況は違った。

ただ一つ、男であるか女であるかで求められる立場は全く違う。

だから少女は誰かと仲良くなろうとしなかったし、少女を取り巻く者もそれを諷めたり仲を取り持ったりはしなかった。

逆に考えても少年達だってそうだ。

そうであるはずなのに、少年は少女の言葉に困ったような表情をしている。

「……じゃあ隣いるよ」

少女の許可を得ずに、少年は隣に座り込んだ。

あまりの突飛な行動に少女は大きい瞳をさらに大きく開いて言葉をなくす。

そんな少女の顔を見て、少年はやんわりと微笑む。

「一緒に居る」

幼いのに少年は強い眼差しだ。

遠くから知ったが、この少年が『守る立場』であるからだろうか。

少女は知らない。頑なに知ろうとも関わろうとしなかったから。

「どうして……そんなこというの」

「僕と一緒に居たいから」

少女と二人つきりしていると、少年が何らかの罰を受けることになるだろうとは予測できた。

少女も多少は叱られるかもしれないが、少年はもつと罪が重く下手すると出入りさえ禁じられるかもしれないのに。

それなのに、こうやって少女の隣に座って一緒に居てくれるという。

……それは少女が心から望んでいることだった。

大人の事情で幼いのに父からも母からも兄弟からも離されて、広いばかりで孤独しかないこの場所に少女はいる。

いくら駄々を捏ねようと、いくら寂しいと泣こうと誰も少女を宥

めるだけで少女の隣には居てくれない。

ただ見た目を褒めて、勝手に将来を決めて、人形のように少女を箱庭に縛り付ける。

「……ほんとう？ほんとうに一緒にいてくれる？」

「うん、一緒にいる……僕は君を守る」

どうしてそんな優しいことを言うのだろうと少女に言い知れない不安が襲う。

いつも期待して、裏切られたことを知っているからこそだった。

少女の焦る表情で何かを悟ったのか、少年は少しだけ気まずそうにしている。

「ごめん、本当は泣いている声……聞こえていたんだ」

少年の言葉に、少女の顔が瞬時に朱に染まる。

寂しいと、嘆き泣いて漏れていた言葉を聞かっていたのは幼くとも少女にとって意地に関わる問題だ。

だからこそ少年が声をかけてきたというのが解ったが。

「……でも君が寂しいなら僕は傍にいる。僕だけでは足りないなら他にもいる」

「え？」

「君は僕らの、守りたいお姫様だから」

お姫様、なんて侍女にいつも言われていることなのに。

それなのにこの少年の口から聞くと、妙に心が跳ねてくすぐったい。

赤みが引いていた頬が今度はほんのりピンクに染まる。

その顔を見られたくなくて顔を背けると、視界の端で少年が少し困ったような表情をした。

その表情が可笑しくて、少女の諦めていた心が久しぶりに弾む。

「じゃあ誓ってみせて……そうじゃないと信じられないわ!」

すると少年は考える素振りを見せた後、自身の腰元を探る。

シャツの下から綺麗な細工の施された短刀を取り出した。

突然少年が何をするのかと目を丸くしていると、その短刀を少女の目の前に置き跪いた。

「この剣に誓ってあなたをお守りします」

それは簡易だが、主従の誓いだ。

本来この剣を捧げる相手は少女じゃなくて、あの方のはずなのに戸惑っている一方、少女は心から嬉しかった。

最初から少年は少女だけを真っ直ぐに見つめる。

少女の役割に期待して宥めたり叱責したりせず、少女の弱さを認めてくれる。

「わたし、あなたに守られてもおかしくないようになりたい……だからずっと側にいてね」

少女が微笑むと、少年は心得たように穏やかに笑む。

……少女は最初から少年が優しい人だと知ったからこそ惹かれたのかもしれない。

そして月日は少女の意志に反して進む。

やがてこの優しい記憶が自身を苦しめることを知る。

少女が美しく咲き誇るのは誰のためか、まだ誰も知らない。

合わない人

全身鏡に映る自分を見て、アルディアンナはため息をつく。

自身の瞳より薄い若草色のレースが重なったドレスは可愛らしく、繊細に織り込まれたこのレースは王都での流行りだろうか。

大振りの宝石は身に着けていないが結び上げられた髪には金細工の髪留めが輝いている。

元々色が白いからとあまり白粉は付けられていないが、唇には紅を引き薄く化粧が施された。

もう一度見て気付かれないようにため息をつく。

それらはとても美しいが、何一つ自分には不相応で似合っていないと感じているからだ。

アルディアンナの後ろには、リザを先頭に侍女が並んで満足そうに微笑んでいる。

やや抵抗を試みるも、瞳を輝かせて楽しそうにアルディアンナの支度をするものだからもう何もいえない。

これからの茶会のことを思うと憂鬱で仕方がなかった。

「大変綺麗ですわ、アルディアンナ様！」

「……ありがとう」

侍女の一人、エレナが嬉しそうに声をかける。

まだ年若いエレナにとっては、アルディアンナは王の寵愛を一身に受ける憧れの存在だ。

落ち込んでいた頃のアルディアンナの世話を直接することはなかった。実際がどうなのかは知らなかった。

しかしこうやって美しく着飾るアルディアンナを見て、羨望で胸が一杯のようだ。

落ち込んでいた頃に世話をしていた侍女たちは、リザを残して他

の皆は居なくなってしまうたので話も聞いていないからそれも無理のないことだが。

「シエルファイス様がお待ちですので、こちらへ」

リザがアルディアンナの手を取って、応接室の方へと誘導する。

応接室にはシエルファイスと、アルディアンナには見たことのない男が居た。

シエルファイスと男は、入ってきたアルディアンナに気付くと直ぐに座っていたソファから立ち上がる。

リザからシエルファイスに交代し、リザたち侍女を下がらせてからアルディアンナを男の前まで導いた。

「アルディアンナ様、こちらは近衛団のヴォルフエルム・ベルムール將軍です」

「初めてお目に掛かせて頂きます、ご寵妃様」

ヴォルフエルムは笑顔を浮かべながら、丁寧にお辞儀をした。

名乗られたベルムールの家名に、アルディアンナは過去の記憶を辿る。

暗号のように多くの家名が羅列していて覚えるのには苦勞したが、今役に立つと当時は夢にも思わなかった。

森の美しかった貴婦人、教えてくれていた時間はそう長くなかったが、アルディアンナの記憶と身体にはしっかりと刻まれている。

それにしても今まで外部との関わりは一切立たれていたというのに、突然現れたヴォルフエルムに探るように問う。

「武官でいらつしやるのですね、ベルムール様」

「ああ、ベルムール家で近衛団とは珍しい……ということですね」
ベルムールはやはり上級の貴族で、王都の隣に広大な領地を有している。

代々どちらかといえば文官を輩出することが多く、現当主は大臣職についているのにも関わらず近衛団なのは珍しい。

アルディアンナの問いに、ヴォルフエルムは内心驚く。

地方の下級貴族の娘であるアルディアンナに、家名一つでそうい

った流れが汲めるとは思わなかった。

思っていたよりも賢く『特別』な教育を受けているらしい、とヴォルフエルムは見方を変える。

「私は次男でして、シエルファイス殿のように側近としての地位は確立しておりませんでしたし」

シエルファイスは長男であり家名を継ぎ、そのために王の側近としても働いている。

この国において必ずしも長男が家督をつぐとは決まってはおらず、当主が次期当主を決めることが出来る。

後の兄弟は嫁ぐか事業を起こし独立したり、家督を継いだ兄弟の手助けを行ったりするのが通例だ。

「クラウディアード陛下にはこの身にかえてもお守りすると忠誠を誓っております」

益々思惑が解らない、とアルディアンナは微かに眉を寄せる。

それに先程から見透かすようなヴォルフエルムの視線が気になっていた。

クラウディアードとは違い、まるで疑っているかのようにで心地悪く感じる。

そんな二人の微妙な空気を察したのか、シエルファイスが咳払いを一つ。

「今日ベルムール將軍にアルディアンナ様の護衛をしていただきま

す」

「……將軍、の方にですか？」

普段は近衛団でも一般兵しかつかないのに、と言外にはのめかす。戸惑う様子をみせるアルディアンナに、シエルファイスは当然のように頷いてみせた。

「貴女にそれだけの価値があるということですよ、ご寵妃様」

ヴォルフエルムが口を挟む。

咄嗟に言い返そうと思うも、アルディアンナは反論を失くす。

結果的にそういう風に見られていることに、気付いてしまったか

ら。

それと同時に、周りから試されているというのを知ってしまった。
「私は仕事がありますのでこれにて失礼いたします」

二人の間の不穏な空気を感じつつシエルファイスはアルディアンナに頭を下げた。

本来なら王の補佐官であるなら、こうやって顔を出す暇もないはずだ。

それでも顔を見に来たのは主が心配しているのと思った以上に自分も気にかけているらしい、とシエルファイスは内心想う。

アルディアンナは心細そうに瞳を揺らしている。

「アルディアンナ様、顔はいつでも上げてください。どうか陛下のご意思のままに」

退室していくシエルファイスを見送りつつも、不思議と隙を見て逃げ出そうという気は起きなかった。

むしろ足は竦み部屋から出たくないという気持ちの方が大きい。

これから王妃に最も近い妃ベアティミリアに会うのだから、それも仕方がないだろうが時刻はもうすぐそこだ。

「では、ご寵妃様」

ヴォルフエルムがアルディアンナに手を差し出す。

護衛だけではなくエスコートの役目もあるのだろう。

「その、『ご寵妃』という呼び方は止めてください」

ヴォルフエルムの手を取らず、睨む勢いでヴォルフエルムを見つめる。

先程からその呼び方には、何か気に障る。その言葉が本心ではないと直感していた。

図星をつかれたヴォルフエルムはというと、何が楽しいのか空いた手で口元を隠すように笑っている。

「失礼いたしました、アルディアンナ様」

まるで騎士のように、許しをこうように優美な動作で頭を下げる。本当なら武官とはいえ爵位では上の相手に、様付けも嫌だったが

そこはアルディアンナは我慢した。

ようやく、差し出されたヴォルフエルムの手を取る。

「では参りましょうか」

どこか本心の読めないが楽しそうな笑顔のヴォルフエルムに対し、アルディアンナの表情は緊張しており頑なだ。

アルディアンナの部屋の扉が開かれて、二人は部屋をでる。

あんなにも逃げ出さなかったこの宮をあっさりと出ることが出来るなんて思いもしなかった。

どこか複雑な気持ちのまま、ベアティミリアの待つ離宮へと向う。

様々な思惑を抱えたまま。

離宮の園

この離宮の庭園では四季の花である、白い花が咲き誇る。

その美しく繊細な花の中心に、花にも負けず劣らずの美しさをもつベアティミリアが佇む。

視界に入ったときから、アルディアンナは呼吸をするのも忘れるほど見入った。

黄色地に白の見事な刺繍が入ったドレスは可愛らしくも上品にみせ、まるで華の妖精のようで錯覚しそうになる。

庭園に入るなり圧倒されて茫然と立ち尽くすアルディアンナに気付いたのか、ベアティミリアはやんわりと微笑んだ。

「ようこそ、いらしてくださいました」

庭園の真ん中のアーチ形の屋根の下に、テーブルが置かれティーセットが用意されている。

ここがベアティミリアの用意した茶会の場所だ。

ベアティミリアに促されて、アルディアンナは席に座る。

茶会といっても席に座るのはベアティミリアとアルディアンナだけで、後ろには何人かの侍女が控えていた。

アルディアンナの護衛に付き添ったヴォルフエルムは数歩下がったところにいる。

同じくベアティミリアの護衛なのか、一般兵とは違う雰囲気の方が控えているのに気付いた。

「わたくしはベアティミリア・フィーネリアと申します。こうしてお会いするのは初めてですわね」

「……アルディアンナ・クレイレです。挨拶が遅くなってしまい…

…申し訳ございません」

緊張のためか、アルディアンナは顔を俯き加減だ。

真っ直ぐにベアティミリアを見つめるのも、逆に見つめられるのもアルディアンナは怖くて堪らなかった。

噂の通り、やはりベアティミリアは花が綻ぶような微笑をたたえ圧倒的な存在感を放つ。

美しいだけではなく力強いようなベアティミリアの瞳はアルディアンナが持てないものだ。

一方で、ベアティミリアには持てないものをアルディアンナは持っているということにまだ自身では気付いていない。

自信のもてないアルディアンナに、ベアティミリアは表情に出さないように思案する。

「……申し訳ないけれど、皆下がっていただけますかしら」

一通り支度が終わった途端、唐突にベアティミリアが切り出す。

主に従順な侍女は表情を変えずに、すっと下がっていった。

「エリクシエス・イグラルド、それとヴォルフエルム・ベルムール。貴方たちもお下がりなさい」

二人だけは、ベアティミリアの言葉で動かなかった。

だからこそエリクシエスとヴォルフエルムの二人を順に視線を向けてから告げる。

「恐れながら、ベアティミリア様。私は陛下のご命令でアルディアンナ様のお傍についております。離れるわけにはいきません」

丁寧な口調でヴォルフエルムが切り出す。

もう一人の寡黙の男、エリクシエスもヴォルフエルムと守るべき対象は違っても同じ思いなのか何もいわない。

陛下の名が出たにも関わらず、ベアティミリアは微笑を崩さなかった。

「陛下にはわたくしから申しておきます。何もここから出て行けというわけではありません」

今度はアルディアンナの方を向く。

その微笑がただ美しいものだけではなく、どこか癖のあるように見えて心なしかたじろいだ。

「アルディアンナ様との友好を深めるため、殿方にはご遠慮していただきたいのです」

同意を求められているようで、アルディアンナは咄嗟に頷いてしまふ。

見ていたヴォルフエルムは仕方がない、という風に苦笑をした。そしてまだ離れたがつているエリクシエスに何かを耳打ちをする。「では、姿の見える位置で見守らせていただきます」

今度は素直に、ヴォルフエルムが挨拶に倣いエリクシエスも挨拶をしてその場を離れた。

ようやく、二人きりだ。

風に乗って、咲き彩る花の香りが匂い立つ。

いつもなら好きなそれらも、今のアルディアンナには気にかける余裕はない。

二人を見送ったベアティミリアの、次の動作を警戒しながら待つ。「さて、これで二人きりですね」

ふう、と一息つくように、ベアティミリアがカップを口元に運ぶ。それでアルディアンナもまだ口をつけていないことを思い出し、同じく紅茶を一口飲んだ。

落ち着いたところで、ベアティミリアが楽しげに小さく笑いを零す。

「アルディアンナ様は、どこまでご存知でいらっしゃるのかしら」

「……どこまでなんて」

「陛下のお気持ちは見ての通り、ですのにアルディアンナ様は受け入れないのですね」

逆にベアティミリアはどこまで知っているのだろうか。

真っ直ぐに見抜くような翡翠色の瞳が、アルディアンナに不安を与える。

しかし一方で釈然としない燦る想いが、ずっとアルディアンナに

あつた。

「ベアティミリア様は……どうして陛下を受け入れなかったのですか？」

短い間だが、決してクラウディアードは国務を蔑ろにしていないことを知っている。

普通に考えれば、アルディアンナとの記憶が淡い想いととも封印されるものだ。

そして目の前の美しいベアティミリアを娶り、国を発展させていく未来が決められていたはず。

それを曲げてまで、アルディアンナを手元に置くのが解せない。

「どうして、クラウを……」

その先は言えない。

ずっと理解している。身分差も、個人としても相応しくないことも。

相応しいのは目の前に居る、完璧な人。

それがずっと悲しいのと同時に、恐れ多いことなのに足元にも及ばないのに『悔しい』なんて思っていること。

理解してしまうのも知られるのも怖い、だから見ないふりを続けていた。

「……アルディアンナ様は陛下を愛していらっしゃるのですね」

ベアティミリアは落ち着いた声で、アルディアンナの想いを見抜く。

落ち着いていて、どこか悲しげな声だ。

「陛下はわたくしのことを愛そうと努力はしたけれど愛したことはないですよ」

今度はアルディアンナがベアティミリアを見つめる。

動作を見逃さないように。

「わたくしも愛せなかった。だって、そうでしょう。わたくし達には既に意中の人いたのですから」

完璧な、妃として相応しい人。

そう思っていたが、初めてベアティミリアの人物が見えてきた。
この方も同じく苦しい思いを抱えているのだろうか、とアルディ
アンナは漠然と思う。

「今の貴方達が羨ましい、そう思うのはわたくしが弱いからかしら
そうやって、弱く微笑む姿はどこにでも居る人と変わらなかった。
誰かを、想う姿。」

花の行方は

むせ返るような花のおいがエリクシエスの鼻腔をくすぐる。
美しいその白い花は懐かしさを与え、同時に決意を思い起こす。
それを与えた、主と決めた人は今、自身の味方だとは決して言えない相手を茶会に招いた。

視界には入るぐらいに遠い主達が何を話しているかは聞こえないが、おそらく聞く権利もない。

「エリクシエス」

声をした方を見ると騎士団とは違う近衛団の制服を纏う男がいつの間にかに横に並んでいた。

貴族としては珍しくない淡い茶色の髪を持つヴォルフエルムは、本来は騎士団に居るはずなのに何故か近衛団にいる。

アウリス国は、大概色素の薄い色の髪の毛だ。

陛下やベアティミリアは美しい金であるし、寵妃と噂されるアルディアンナも茶毛である。

しかしエリクシエスは違い、この白い花に囲まれていると更にその色は違和感を増す。

そつとヴォルフエルムから視線を外し、遠くの二人を見た。

「やっぱり気になるか」

からかう様な軽い口調のヴォルフエルムを軽く睨む。

こういう何を考えているのか解らない笑みは昔からだから今更だが、遊ばれる気も更々ない。

それにいくら護衛する対象が視界に入るぐらいに居るとはいえ、こうやって私語をするのは厳禁だ。

この離宮が陛下の管轄下にあつて安全とはいえ、相手が何をするかもわからないという思いもある。

「アルディアンナ様はベアティミリア様に何かすることはないさ。あの方は自分の立場を心得ている」

僅かな時間ではあったが、アルディアンナは決して勘違いするような女ではなかった。

ましてや国王陛下を虜にするほどの美貌を持つわけではなく、ただ素直な人。

正直どこに惹かれたのかはヴォルフエルムには解らなかったが、クラウディアードだけが知っているのだろう。

「それに気になるのは……」

アルディアンナはどうみても地方貴族の娘だ。

それなのに名乗った名前から色々と見抜き、教えても居ないのに正しい礼儀作法を知っていた。

その礼儀作法は完璧で、地方ではそういった教育は受けにくい。

「……もしかしたら、アルディアンナ様は取っておきなのかもしれない」

どういう意味だ、とエリクシエスが視線をやるとヴォルフエルムは肩をすくめるように見せた。

誤魔化すわけではなくヴォルフエルムとて、全てがわかっている訳ではない。

それに元々ベアティミリアは幼馴染のようなもので、二歳年下の彼女は妹のようにも思っていた。

今まではベアティミリアのことを思うと、アルディアンナのことは面白くないと思っていたが。

「……陛下の心の安寧になるならばそれもよし、か」

ヴォルフエルムは、クラウディアードに忠誠を誓っている。

それは幼い頃からのクラウディアードの人柄や決して環境に甘えることをしなかった努力を知っているからだ。

即位してから祿に休むこともなかったのに、垣間見た寵妃との逢瀬の中で安らいだ顔をしていたのを見た。

もしかしたらクラウディアードもベアティミリアのことを自身と

同じように思っているのかもしれないとヴォルフエルムは思う。

「だめだ」

今まで言葉を発することのなかったエリクシエスが硬い声でヴォルフエルムの考えを遮る。

珍しく感情の乗った声に内心驚きつつも表情を伺うと、反して無表情だった。

それに怪訝に感じつつも、エリクシエスの言葉を待つ。

「……ベアティミリア様には必ず王妃になっていただく」

「エリクシエス？」

「それがベアティミリア様のお幸せに必ず繋がる……そのためならば」

その言葉は続かなかった。

ヴォルフエルムがエリクシエスの本意を知ろうと伺うが解らない。その漆黒の瞳は全てを隠し、何の感情も映し出そうとしなかった。

「……エリクシエス、お前はベティが何を思っているのか知っているのか？」

ベアティミリアは一番エリクシエスに懐いて、そして慕った。

その思いの行方はいまのヴォルフエルムには計り知れない。

しかし、もしあの頃と何にも変わっていないのだとしたら。

「……時間だ」

エリクシエスの言葉とともに、ベアティミリア達に視線を向けると二人は席を立っているのが見えた。

どうやら茶会はお開きになったようだ。

今までの会話などなかったように、エリクシエスはまた従順な騎士へと戻っている。

ヴォルフエルムも今までの考えをとりあえず留め置き、アルディアンナの元へと近寄った。

「何を話されていたんですか」

宮に帰るアルディアンナを見送った後、珍しくエリクシエスから話しかけてきたことに内心驚きつつもベアティミリアは笑顔を返す。そして楽しそうに人差し指を口元に当てる。

「女同士の秘密、ですわ」

「……秘密、ですか」

「ええ、でも貴方にはきつと解らないわ」

ベアティミリアは白い花を一つ摘み取る。

懐かしいその花は、きつと目の前の人には届かないのだろう。

「……やっぱり想い合えているなんて、羨ましいですわね」

誰にも聞こえないように、小さく呟く。

聞こえなかったはずなのに、エリクシエスはベアティミリアの花を見つめる切ない笑みを見なかったふりをした。

花の行方は（後書き）

遅くなってしまう大変申し訳ございません！
次はおそらく久々の陛下とアディの話になりそうです。

息衝くもの

離宮とアルディアンナの住まう宮の間には長い回廊が続く。

回廊といっても雨避けに屋根がある程度で壁はない。

豪華ではないが、宮に相応しいように整った景色に目を奪われてアルディアンナは足を止めた。

「……ここから逃げ出すのは不可能ですよ」

足を止めたアルディアンナに心なしかからかうような口調で、後ろを歩いていたヴォルフエルムは隣に並んだ。

警戒しているというよりは、様子をみて楽しいで居るようだ。

それにからかう様な笑みにむっとしたようにアルディアンナは顔を背けた。

「……知っています」

こちらに連れて来られてから何度逃げ出そうとしたのか解らない。そのたびに無力で、ここからは出られないという絶望を味わった。それに今は不思議と逃げ出そうとは思わない。

今までだったらこの機会を逃そうとしないのに。

「無礼を承知でお尋ねいたしたいのですが」

「え？」

「アルディアンナ様はどちらの御方から教育を受けなさったのですか？」

じつと探るようにヴォルフエルムは見つめる。

先程からの胡散臭さはないが、居心地が少し悪い。

「私の実家の近くにいらっしゃった貴婦人ですが……」

今思つと、クラウディアードの母親であつたのなら『王妃』であつたということだ。

道理で、礼儀作法が完璧で貴族勢力図のことも掌握していたはず

だ。

今もアルディアンナに教育したのは何故か、それは解せないがこうして役に立っている。

複雑な気持ちが過ぎり、アルディアンナの視線は自然と床へと落ちた。

「……なるほど」

一方でヴォルフエルムも、合点がいった。

事前に知っている中で、アルディアンナの家族が治める領地は片田舎だと聞いている。

それなのに、教えなくとも王宮での礼儀作法をアルディアンナはやってみせた。

あの田舎に居て、アルディアンナに教育を施したのは、そしてその意味は。

「アルディアンナ様、あなたは……」

言いかけた言葉をヴォルフエルムは留め、途中にアルディアンナの向こうに何か気付いたようだ。

たたずまいを直し、忠誠を誓うように頭を下げる。

こんな動作をする相手は一人しか居ない。

「アルディアンナ」

滑らかなその声に、アルディアンナは一瞬だけ震える。

ベアティミリアとの話が一瞬にして思い返されて、まともに顔を上げることができなかった。

それに構うことなく、ヴォルフエルムはクラウディアードに声をかける。

「陛下、公務は終わられたのですか」

「ああ、予定より早く終わったので、こうして迎えに来た」
アルディアンナの手を取り、自身の腕の中に引き寄せる。

二人きりでもないのに構わずに甘い表情を見せるクラウディアードに、アルディアンナは顔を赤くさせた。

ヴォルフエルムも、やや苦笑気味な表情をしたかと思うとわざと

らしく頭を下げる。

「では私はここで失礼致します」

そのまま、二人の前から辞する言葉を口にする。

王の寵妃であるアルディアンナには会う機会は今後そうないだろう。

「あの……今日はありがとうございました」

近衛団の將軍とはいえ、そう暇ではないはずだ。

それにヴォルフエルムはアルディアンナよりも本来は位の高い貴族である。

それなのに『寵妃』の護衛を任命されたのだから、アルディアンナには申し訳なかった。

「いえ、お気になさらないください。自分から志願したので」

「え？」

「それよりどうか顔を上げてください……貴女は、陛下の大切な『花』だ」

聞き返す前に、今度こそヴォルフエルムは去っていく。

呼びかける声もう届かず、すぐ後姿も見えなくなった。

「随分と、仲良くなったな」

「仲良くなんて……なつてないです」

アルディアンナの不本意そうな声色に、クラウドディードが小さく笑う。

クラウドディードは仲が良いように見えたらしく少々不満げだったが、アルディアンナの返答が面白かったのかそれもなくなった。

引き寄せていたのを一歩分だけ話して、手を引く。

急がずゆっくりとした歩調で、二人は回廊を巡る。

「ドレスも髪型も良く似合っている」

「あ、ありがとう……」

「だが、髪を下ろしているほうが好きだな」

さらりと、サイドに流している結われていない髪を掬い上げる。

そつえば、幼い時はアルディアンナはきつちりと髪を結うこと

はせずに軽くまとめて背に流していた。

クラウドディアードの印象ではそれが強いからか、こちらに連れてこられてからも殆ど結われることはない。

こうやって髪を触るのが好きなんだろうと、唐突に思うと何だか酷く落ち着かない気分がした。

「……ベアティミリアに会ってみてどうだ？」

髪から手を離され、ぎこちない言葉が届く。

本当は会わせたくなかったのか、と少しだけ焦燥が過ぎる。

不安げなアルディアンナに気付いたのか、クラウドディアードはふつと笑うように表情を緩め頬に触れた。

「何といていた？」

「ベアティミリア様は……クラウドのことを愛してはいないと……」
傷つくだろうか、とアルディアンナは一瞬だけ焦るがそんな様子は見せなかった。

それどころか、少しもベアティミリアも自身の妃であるはずなのに気に留める素振りも見せない。

そのことにどこかでアルディアンナは安堵しているのに気付いた。
「ああ、ベアティミリアの愛している男のことは知っているんだ……」

懐かしいような、笑みだ。

ベアティミリアも同じような笑みを時折浮かべていた。

愛し合っていないくとも、アルディアンナには踏み込めない何かがある。二人にはある。

それこそが、周囲に望まれていた結果からもたらされたものなのか。

「ベアティミリア様は私がクラウドを……愛していることを見抜かれました」

縋りつくようにクラウドディアードの胸元に頭を寄せた。

今、顔を見られてくないからだ。

おそらく愛し合っていないのが真実だとしても、アルディアンナ

は嫉妬していると自覚した。

「私たちが羨ましいと……笑っていました」

そういった直後の笑みを、アルディアンナは忘れられない。

どういった形であれ、アルディアンナはこうやってクラウディアードに届く。

「アルディアンナ」

強引に顔を上げさせられる。

顔に掛かった髪を避けながら、クラウディアードはアルディアンナの目元を拭った。

「……私も、ベアティミリアも、アディに残酷なことを言う」

アルディアンナは本来王宮に足を踏み入れることもなく、彼女の愛する故郷で穏やかに暮らす人生があった。

それをクラウディアードの一存で曲げて、狂わせた。

そしてベアティミリアもそれを後押しする。

ずっと、アルディアンナは何も解らないまま抵抗していたのに。

「それでも、ずっと傍に居て欲しい……アディ」

真摯な瞳を真っ直ぐに受け入れて、アルディアンナは素直にクラウディアードの言葉が収まるのを感じた。

ベアティミリアを実際に知ったからかどうかは解らない。

それでもこの美しいアイスブルーには、アルディアンナが写っていた。

何故か涙が止まらない。

絶望で流したもので、悲しさでもない。ただ胸が一杯だった。

「愛している……」

瞼に降るような口付けを受け止めながら、アルディアンナも同じように心の中で囁く。

そしてゆつくりと二人の唇が重なり、アルディアンナは瞳を閉じた。

花がひっそりと息衝いていくのを感じながら。

息衝くもの（後書き）

お待たせしてしまい大変申し訳ございませんでした。

また時間があいてしまうかと思いますが、最後までお付き合いいただけたら幸いです。

変化の兆し

ここから逃げなくては、と強く思う。いや、今になっては『思っていた』のだろう。

アルディアンナはこの宮に、何のために連れてこられたかを知つてからずっと追いつて立ってられていた。

幼いときの記憶が、アルディアンナを追いつめる。

森の屋敷に住んでいた貴婦人との勉強会はアルディアンナにとって楽しく為になったものだが、同時に貴族社会への恐れも抱かせた。昔に比べれば緩くなった、とは言うもののやはり因習は根強く残る。

貴婦人はアルディアンナのことを想うからこそ厳しく躪けたが、それが仇になったのが唯一の誤算だろう。

そんな貴婦人の思惑に反してアルディアンナは恐れを捨てきれずにいる。

その結果が逃避へと駆り立て、多くの人を巻き込んでしまった。側仕えの侍女になったりザだけはアルディアンナを宥めずかしても、決して逃避への手助けはかさなかつた。

だからこそ、今もなおアルディアンナの側にいる。

「アルディアンナ様」

つい心地よさに負けて転寝をしていたのだろうか。

呼ばれた声につられるようにアルディアンナはゆっくりと瞼を開く。

体を包み込むようにして作られているチェアはアルディアンナの

お気に入りだ。

「リザ？」

「お休みのところ申し訳ございません。陛下がお見えになっておりますが、よろしいですか？」

傍らのリザは氣遣うように伺う。

夢から覚めたアルディアンナは今までのことを含め申し訳ない氣持ちになる。

小さく応諾の意を伝えると、優しいまなざしで微笑んだ。

リザが隣の間へと行ったのを見届けると、アルディアンナはチェアから立ち上がる。

相手はよく知った人でも、国王陛下だ。

座ったままでは失礼にあたるだろう。

その本人は、リザと入れ替わるようにすぐに入ってきた。

相変わらずの目も眩む美貌に、アルディアンナは慣れない。

「すまない、寝ていたか」

「転寝だったから」

氣恥ずかしそうに笑うと、クラウディードは表情を柔らかくした。

その表情になると昔の面影が見える。

王としての顔ではなく、アルディアンナのよく知った幼馴染の顔にほっとするのは秘密だ。

クラウディードはアルディアンナの手を取り、ソファへと誘導する。

座っても手は離さず、二人の距離は近いままだ。

クラウディードの空いている方の手が、ゆっくりと髪を撫でてそのまま頬にすべる。

一連の動作はいつもの通りだが、いつまでたってもアルディアンナは恥ずかしく慣れない。

俯いてしまいたいところだが、真顔で翳りのさしたような瞳のクラウディードから目が離せなかった。

「アデイに見せたいものがある」

そういつて手を離し、懷から何かを取り出す。

若草色の封筒に封された蠟印は紛れもなくアルディアンナの実家の家紋だった。

印に気付くとアルディアンナは思いもよらず封筒を差し出してきた人物を見つめる。

戸惑うアルディアンナの視線を受け止め、固く無表情だったがやがて苦笑へと変えた。

クラウディアードはできるだけ優しく、穏やかに言葉を紡ぐ。

「クレイレ子爵から、アデイへの手紙だ……今まで見せることはできなかった」

もし見せてしまったらアルディアンナは益々故郷への思慕が募るのではないか。

なにより益々恨まれて拒絶されるのが嫌だった。

しかしあのベアティミリアとの茶会以来、アルディアンナは少しずつ変わっていった。

拒絶することもなくクラウディアードを受け入れてくれる。

何気ない話に微笑みを見せてくれることも多くなったし、触れても拒むことがなくなった。

なにもかも厭世的になっっているのではなく、前向きな様子でもあった。

だからこそ、今手紙を見せようと思ったのだ。

「今までのすまなかった……本来ならもっと早く」

隣に座るクラウディアードの手にそっと触れる。

アルディアンナは穏やかに微笑みながら、首を横に振った。
「うっん……中を見てもいい？」

クラウディアードは勿論というように頷く。

それを確認してから、手紙の封をあけた。

生真面目な父の整った字を見るとひどく懐かしい気持ちさがこみ上げる。

手紙の内容は、ごく当たり障りのないものだった。

時候の挨拶の一文から始まり、元気にしているかと家族として心配しているという。

子爵として自治領の最近の様子や、家族の様子も簡潔に記されている。

最後に、こちらで拠り所をなくしたらいつでも帰ってきてほしいという文があった。

その文に自然豊かな故郷の思い出がアルディアンナの胸に占める。帰りたい、けれど今はまだ帰らない。

こみ上げてくる涙を堪えながら、そつと手紙を折りたたんだ。

「……帰りたいか？」

ずつと見守っていたクラウディードは、静かに問う。

ただ素直にその言葉に驚いて顔を上げる。

アルディアンナの視線の先には、どこか憂いを湛えた表情があった。

「私は……クラウの傍にいるよ」

「アディ……」

「だって約束、したから」

二つの忘れられない約束。

本来なら叶うはずもなかった約束で、これからも本当は叶わないはずの約束。

覚悟はできていない、でもアルディアンナはもう逃げるのはやめた。

そう思えたのも、ベアティミリアに会ってからだ。

彼女とは、短い時間だったがよく話をしたと思う。

まさに王妃に相応しい人であり、ただど一人の『女性』であった。花が綻ぶようでいて、どこか哀しげに佇むベアティミリアが強く印象に残る。

とつとつ聞けなかった彼女の願いが、唐突にアルディアンナは気になった。

「……ねえ、クラウド。ベアティミリア様の願いつてなに？」
ずっと気になっていた。

あの茶会より、一月は立とうとしている。

その間ベアティミリアとの茶会が開かれることはなかったし、立
場上手紙でやり取りということもなかった。

「それは……直接ベアティミリアから聞いたほうが良い。もしアデ
イさえ良ければもう一度会わないか？」

「いい……の？」

クラウドディアードがベアティミリアと会うことに乗り気ではなかつたのは知っている。

時折見える複雑そうな表情で知ってはいたが、どうして乗り気ではないかとまでは分からない。

分からないが、アルディアンナはその提案には驚いた。

同時に畏れ多くも感じる。

ベアティミリアはまさしく最上の人であつたから。

「ああ、きつとベアティミリアも望んでいる……動き出すのを」

最後のほうの言葉は小さく、だけどはっきりと聞こえた。

何を、とは問わなかった。アルディアンナとて解る。

そしてベアティミリアがアルディアンナに期待していることも薄々感じてはいた。

それがおそらく願いに続くのだろう。

少しずつ、何かが変わっていくことを。

変化の兆し（後書き）

遅くなつてしまい大変申し訳ございません。

この話より、新しい章となります。

まだまだ展開があつちこつちと飛びますが、お付き合いいただけますと幸いです。

遠くなった日

アウリス国より北にある場所に今は歴史の中にしか名を残さないアルトゥールという国があった。

現アウリス国王の2代前の時に突如、クーデターが起きる。

当時のアルトゥール国の王弟が叛意を抱き起こしたのだ。

いつの間にかに私欲におぼれ腐敗した貴族を味方につけていた王弟の手により、王家の名に連ねるものは見せしめのように惨殺された。

長年友好国として付き合いのあったアウリスを含め周辺国は自国に降りかかるかもしれない戦禍を避けるため、表立つては沈黙を貫いた。

内戦にほかの国が介入すると、それだけ火種は大きくなり混迷に陥るからだ。

やがて力によって国を掌握した王弟による悪政に、従うしかなかった民たちは虐げられた。

長く苦しみを強いられていた中で民たちは、とある娘を救いの主として押し立てる。

やがて小さな希望であったそれは、国すべて飲み込むまでに強くなった。

その奮い立った民たちを先導した娘こそ秘密裏に平民のもとへ嫁いだ王女の一人娘で、王弟以外の正統なる王家の後継者だった。

こうして、アルトゥールの内戦は王弟が討たれることで終わりを見せる。

その後復興には惜しめない援助を約束していたアウリス国や周辺

国とともに、この娘を新たな女王としてアルトゥールは新たな歴史を刻むはずだった。

しかしこの王家の血を引く娘はそれを拒み、その代わりに当時でさえも大国であったアウリスの属領になることを提言した。

この頃にはあまりにも王家の被害は大きく、またアルトゥールという国が自身の力では立て直せないぐらいに疲弊していたからだ。そしてアウリスの属領とすることで、余計な反発をなくし支援を受けやすくするのも目的の一つだった。

なにより、娘は表舞台からはひっそりと消えるつもりであった。元々存在はなかったことにされていた身であったし、育ちも庶民であったがゆえに女王などなるつもりはまったくなかった。

そのつもりだった娘に民たちは、属領となるならばその領主にと望む。

強く懇願され困った娘は、アウリス王の提案によりアウリスの諸侯を婿に迎える。

当時復興に携わったアウリス軍の若き将で、その家柄はアウリス国の歴史にも深く繋がるものだった。

一方で、一見すると政略にしか見えないこの婚姻が実は両者の思いが通じ合っていてされているものとは語り継がれていない。

「ねえ、それで幸せになれたの？」

話をおとなしく聞いていた可愛らしく少女は

首を傾げると、さらにと二つに結われている金の髪が揺れた。

目の前の少年に身を乗り出して、期待に満ちたように頬を紅潮させている。

無理もない、少女はこういった話が好きだからと少年に語らせたのだ。

話の切っ掛けとなった国章、今となつては家紋の刻まれた短刀を仕舞う。

「勿論お祖父様もお祖母様も仲睦ましくしていらっしやいます」

「そう……よかった！」

ふうつと満足そうに少女は胸を撫で下ろす。

そんな少女に少年は目を細めて微笑む。

この少女の園で出会ったところと少女は変わらない。

変わったことといえば、最初の印象より年相応に表情が柔らかくなり泣くことより笑うことのほうが多くなった。

素直に感情を表現しまだまだ幼い印象の少女に対して、少しずつ少年は変わった。

騎士を目指しているため体を鍛えているおかげで、時々表情は大人びているようにも見える。

「それより！敬語はやめてって言っているでしょう？」

笑っていたかと思うと途端に眉を吊り上げ、怒っているという態度を示す。

少年は毎度のことながら困惑したように苦笑を返すしかない。

「しかし……」

「いつものようにベティと呼びなさい！」

少女の、ベティの言葉に、益々口ごもる。

そもそもこうやって二人きりで会うことさえ良いことではないのに。

しかし、目の前のベティは頬を膨らましている。

いくら怒っているという態度を示しても、少年にはベティが可愛らしくしか映っていないのに。

「……わかりました、ベティ様。ですが、俺は今作法の練習中なので付き合っていただけですか？」

騎士しての特訓で、礼儀作法も叩き込まれる。

勿論もつと幼い時から教育はあったので、さほど苦ではないが目の前の少女を納得させる理由にはなりそうだと思いついた。

少年の咄嗟の思い付きではあったがそう言われてしまったては、ベティも困ったように悔しそうに表情を変える。

何かを要求することはあっても頼られることがないので嬉しい反面、悔しい気持ちでいっぱいなのだ。

「し、仕方がないわね！どうしてもというならわたくしも付き合っ
て差し上げますわ！」

仕方ない、と強がるベティに、少年は笑みを誘われる。

ベティは遠目で見るときはまるで仮面を被っているように静かで、まるで愛らしい人形のようなのだ。

本来はこうやって活発なのに。

本来はこうやってくるくると表情を変えて可愛らしいのに。

そんなベティの姿を皆が知らないというのを残念に思う一方で、少年だけが知っているベティに優越感に似た思いを感じる。

「ありがとうございます、未来の王妃様」

そう思う一方で、こんな感情は持つてはいけないう『未来の王妃』という言葉で自身をけん制する。

何のためのにここに自身がいるか、忘れないためにも。

その言葉を出すたびに、ベティが泣き出しそうに複雑な表情を浮かべていても知らないふりをする。

「わ、わたくしも練習しなくてはいけませんもの……」

歪めた顔を見られないようにベティは少年に背を向けた。

声色から泣き出してはいないだろう。

その小さな背中を抱きしめることができるならば。

少年は強く自制するように拳を握りしめる。

「でも……」

「え？」

「あなたはわたくしのそばにいてくれるのでしょうか？」

突然くるりと振り返ったベティはもう微笑んでいる。

微笑みはまるでこの庭園を飾る白い花に匹敵する美しさだ。
息が止まるぐらい見とれそうになりながら、少年は頷く。

あの日、初めて出会って少女を守ると誓った大切な思いは忘れ
ない。

「それなら……今はその約束があればいいの……」

幼い時にここに連れてこられてから数年。

さびしいと泣いて過ごしていた日々我突然出会った少年。

あの日の約束がどれだけベティの心の支えになっているのかを、
目の前の少年はきつと知らないしまだ知らせようとは思わない。

「必ず叶えてくださいね」

ベティは誰にも見せることのない、特上の笑みを浮かべた。
ずっとこんな日が続くと信じて。

ただ、その日は運が悪かったとしか言えない。
今までずっと見つからなかったのに。

偶然庭園から出るところを見られたのだろう。

それも、ベティの教育係も務める筆頭侍女に。

「……これが殿下に対してどれだけの裏切り行為になるのかわかっ
ていらつしやるの!？」

「わかっています。俺はあの方に忠誠を捧げた……未来の王妃様で
いらつしやるベアティミリア様はこの命に代えても守る方です」

王太子であるクラウディアードは将来立派な王となる。

同じ年であるのに知慮が深く寛容なクラウディアードは尊敬の対
象だ。

そして自分自身がここににいるという理由でもあった。

「それ以上に、感情はないとでも？」

「……もちろんです」

「でしたら今後はベティミリア様へ話しかけるのは勿論のこと、感情を見せることも禁じます」

突然の要求に思考が止まり少年の表情が固まる。

侍女は少年の様子に気づきながら、あえて厳しい態度のまま言葉を重ねた。

「でなければ、このことを殿下に申しあげ貴方は故郷に帰っていた
だくことになります」

……強制帰還になることは少年にもわかっていた。それでも少女から離れることはできなかった。

わかっていたからこそ、今どうするべきかも分かっている。
約束を忘れなければ、大丈夫だと自分自身に言い聞かせて。

言い聞かせなければ、心は納得できなかった。

一瞬だけ少年の脳裏に白い花に囲まれて微笑む少女が過る。

手の届かない、高嶺の花だということは初めから知っていたはずだ。

この日以来、少女の秘密の園に少年が訪れることはなくなった。

ここでの誓いは誰にも知られないまま、少女は美しく成長し、少年は強くなっていく。

花は咲き誇ったまま。

遠くなった日（後書き）

主役が出てこずで大変申し訳ございません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9540n/>

愛しの花

2011年10月24日10時09分発行